
エンシェンティア

gray-zone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンシェンティア

【Nコード】

N71480

【作者名】

gray-zone

【あらすじ】

全世界で登録ユーザー数が2億人を越え、異例の人気を誇っているオンラインゲーム“エンシェンティア”。この物語はある少年がこのゲームを始めるところから始まる。

プレイ初日（前書き）

~ Welcome to the world of
antia~

プレイ初日

2011年。日本発、世界で活躍するあらゆる大手ゲーム会社が協力開発して新世代ゲームを開発すると発表。

2017年。その協力開発チームが6年の歳月をかけて件のゲームの開発に成功と発表。

2018年、春。件のゲーム“エンシェンティア”が全世界同時発売。



江坂 エサカ 緋花 ヒバナ は昂る気持ちを抑えきれなかった。

今日は待ちに待った15歳の誕生日なのだ。今まで体験した14回の誕生日のどれもこんなに嬉しい気持ちになった事はなかっただろう。

2年前に全世界同時発売されたゲーム“エンシェンティア”。それは発売からおよそ一カ月で昨今のゲーム業界の記録を塗り替えるほどの人気商品となった。2年経った今でもプレイ人口は衰える事を知らず、未だにその数を増やし続けている。しかしそれは15歳以上限定の人物に限られている。

その理由として“エンシェンティア”の利用条件が15歳以上からとなっているからだ。

こういう理由で江坂はテンションが上がっているのだ。それにな

んという運命か今日は日曜日なのだ。朝6時に起床し7時には家を出ていた。

江坂は黒のTシャツにジーンズという格好だ。家を出ると右隣の、玄関先に“仙波”^{セナミ}という表札が掲げられている一軒家の呼び鈴を鳴らした。しばらくすると玄関が開いて赤ぶちの眼鏡をかけた江坂よりも小柄な女の子が出てきた。スウェット姿で今しがた起きたばかりという格好である。

「ちよつと緋花！ 待ち合わせ時間より1時間も早いじゃない！」

「もう待ち切れないって。早く行こうぜちー姉！」

江坂は寝まき姿の仙波の右手を手を取って外へと促すが、当然彼女がそれを許可するはずも無い。江坂の腕を少々強引に振り払う。

「あたしまだパジャマだって。せめて10分待ってよ……。一時間待つよりマシでしょ？」

「分かった分かった」

深く息を吐いて仙波は自宅の中へと戻っていった。

「じゃ行こっか」

「結局30分も待たされた……」

結局10分ではなく、江坂の言う通り30分後に仙波は家から出てきた。一応時間が遅れた事を江坂は彼女に抗議したが、「うるさ

い」の一言で一蹴されてしまった。

現在、江坂の隣を歩いている仙波^{センナミ} 千鶴^{チヅル}は江坂の2つ年上だ。しかし幼いころから親同士の仲が良かったのもあり姉弟のように仲が良くなった。要は幼馴染みである。徒歩で10分程度歩くと大きなビルが立ち並ぶ大通りに二人は出た。日曜日だというのに片側三車線の道路を無数の自動車が二人の前を走り抜けて行く。

林立するビルの中の一つの入り口が人の行列によって占領されている。

朝っぱらからデモなどという物騒な事を行っているのではなく、この行列を作られているビルそのものが巨大なゲームセンターになっているのだ。今日は日曜日のために大人子供関係なく、様々な人たちがこの列の主な構成員となっている。

「ほら、この時間に来て正解だっただろ、ちー姉」

「いや別にこんな早くに来なくても結局はエンシェンティアは出るよ」

江坂は千波の言葉を聞き流して列の最後尾に並び、仙波もそれに従う。現在は7時50分。ビルが開放されるまで10分あまりの時間があるがその時間も瞬く間に過ぎ去りその時がやってきた。

周りのビル群に引けをとらないほど、むしろそれら以上に存在感のあるこのビルの名前は“エンシェンティア狐^{コノバシ}之葉市”。件のゲームのためだけに建設され、件のゲームだけが稼働している高層ビルの形をしたそれ専用のゲームセンターである。

一步、建物内に入ると休憩を目的としてソファやテーブルが大量に置かれた巨大なロビーがある。その奥にはこの建物内のあらゆる

情報を取り扱っているインフォメーションセンターがあり、左右には上階へと続くエスカレーターがある。

「まずはそのインフォメーションで登録をしようか」

「おっけー。やっと俺もエンシェンティアデビューか……」

うんうんと感慨深げに江坂は首を縦に振りながら先に行く仙波の後についていく。

「ようこそエンシェンティア狐之葉市へ！ ご要望は何でしょうか？」

快活な声で2人を迎えたのは係員の制服を着た女性だった。可愛らしい童顔の彼女は受付嬢としての役割はそこにいるだけで十二分に果たしているだろう。

「新規登録をしたいんですが……」

「かしこまりました。えっと、そちらの男の子が登録するんですか？」

「はい！」

気合一声とはこの事だろう。あまりの大声に周りにいる人たちが驚いて一斉に江坂の方を向いたのだ。傍にいた仙波はゆっくりと江坂から離れて他人のふりに努める。当の本人はそんなことは気にせず受付嬢から渡された書類に必要事項を記入していく。

「それではプレイヤー登録料をお願いします」

「はい」

江坂は財布から1万円札を取り出して受付嬢に渡した。エンシェンティアは登録料が高額なだけで利用料は一切無料である。

それらの手続きが終わると江坂は受付嬢から1枚のカードを貰った。自分の名前がローマ字で書かれていて中央にキャラクターが描かれているカードだ。

「これは？」

「それはプレイヤーカードです。エンシェンティアをプレイする際にそのカードを使用して下さい。使用方法はその時に説明されるので2〜5階のオンラインルームまで行ってください。それでは行ってらっしゃいませ」

受付嬢に見送られた2人はインフォメーションから右手に向かい、昇りのエスカレーターへと足をかけた。エスカレーターで4階を目指しながら仙波は人差し指を立てて、まるで教師のように1段下にいる江坂に説明を始めた。

「エンシェンティアには2つの遊び方があるんだ。

まずはオンラインモード。これはネットゲームみたいなものだよ。色んな人とアーティファクトを集めたり冒険をしたりするんだ。で、2つ目がバトルモード。自分と他のプレイヤーで戦うことができるの。要はプレイヤーVSプレイヤー」

2階に着いたのでさらに4階を目指すために2人はもう一度昇り

エスカレーターへと足をかける。

「つまり、友達と一緒に冒険するモードと友達と戦うモードがあると思えばいいのか？」

「大雑把に言えばそうかな。よくできました」

微笑みながら仙波は江坂の頭をわしゃわしゃとなでる。実際は江坂の方が身長は勝っているが、エスカレーターの段差によってその立場は逆転している。江坂は恥ずかしさを抑えきれず乱暴にその手を払ったが仙波は笑ったままだった。そして3階に着いたのでもう一度上昇のエスカレーターへと足をかけた。

「話を聞いてたから分かると思うけど今からやるのはオンラインモードなの。まずログインしたらそのまま待っててね。私が緋花の方に行くから」

「オッケー」

4階に着いた江坂は仙波と別れて無数にある個室の内の一室に入った。

室内はまるでテレビで見たネットカフェの個室のようなそんな部屋だった。2畳ほどの広さの個室には、しかしパソコンなどの設備があるのではなくただロボットアニメなどでよく見るコックピットのような設備が、外開きのドアを開いた江坂を待っていただけだった。こちらに座席を向けている。操作が全く分からない江坂だがとりあえず入室して座席に座ると、頭上から黒いカバーがゆっくりと降りてくる。それは江坂の目の前をすっぽりと覆ってしまうが頭上だけはそのまま室内の天井が見えるようになっていた。緊急時のための救出経路のようなものだろうか。

目の前は電源が切れているパソコンのように真っ黒だが電源が入り、表示されるのはエンシェンティアを初めてプレイするの否かという問いかけ。江坂は右の肘掛けにあるキーを操作して“YES”にカーソルを合わせる。すると表示が今度はプレイヤーカードを左の肘掛けにあるカードリーダーに挿入する、という風に変化した。指示通りに先程もらった絵柄の無いプレイヤーカードを挿入する。

—————キーン。

「まだかまだか」と待ちわびてる江坂の耳が不思議なノイズを捉えた。すると彼の意識は突如としてやってきた睡魔に侵食されてゆくが、不安の代わりにあるのは冷めることのない高揚感だった。

見るのは夢、ではなくリアル精神感型MMORPG“エンシェンティア”へのアクセスに成功した事の証明である~Welcome to the world of ancientia~と書かれたロゴだった。



エンシェンティアとは未来の世界を世界観としたゲームである。

現代より遙か未来では様々な技術が進歩して現在の文明を越える超文明を作り上げたが、とある大厄災によって超文明は突如滅びてしまった。

その大厄災からさらに1世紀。人類は滅亡こそしなかったが築きあげた超文明は消え失せてしまい、動物などの生態系なども大きく

変わってしまった。人類が頂点に立つ時代は終わりを迎え、今では魔物がのたうちまわる危険そのものの世界へと変わり果ててしまった。

この時間軸がエンシェンティアの舞台となる。

しかし人類には希望が残されていた。1世紀前の超文明の遺産“アーティファクト”である。これを再現することは出来ないが現存しているものを扱うことはできる。これなら魔物に立ち向かうことができるのだ。

世界中に散在している“アーティファクト”を発掘発見し、使用し、魔物から人類を守るのがプレイヤーである。時に同業者と協力し、時に互いに腕を磨き合う。ゲーム内での自由度も高いのも人気の理由の一つだろう。



江坂は目を開ける。

目の前にあるのは大厄災によって一度滅びてしまったという設定の世界の中に存在する寂れた村だった。家屋などは全て木造である。ついに念願が叶った。やっと“エンシェンティア”を始める事ができる。久しく味わっていなかった極上の満足感彼の脳髓から全身へと浸みわたる。

「あ、来た来た。こっちだよ緋花」

「お、ちー姉」

彼を呼び止めたのは先程まで現実で共に行動していた仙波だった。彼女は桃色の髪を二つ括りにしていて、鮮やかな髪色と同色を基調としている着物を着ている。普段の彼女は黒い髪を男の子っぽく短めにしているのでその分のギャップが激しい。幼馴染の仙波が女の子らしいので驚きのあまり啞然としている江坂を見て仙波は大いに笑った。

「アハハハハ！ 緋花ってばそんなアホらしい顔してさ。これはゲームなんだから装備とかアバターぐらいあって当然でしょ？」

「けど感覚がもう現実と区別がつかないんだよ。本当に自分自身が“エンシェンティア”の世界に来たみたいなんだって」

「まあ、それがこのゲームの一番の売りだからね。プレイヤーが本当にゲームの世界に入ったようなこの感覚、世界初の精神感型MORPGなんだから」

得意げに話す仙波は二つ括りにしている桃色の髪を揺らして江坂の手をとる。かく言う自分もリアルの自分とは違った容姿をしている。なぜ仙波は一目で自分だと分かったのだろうか。彼にとってどうでもいいこの疑問は一瞬で霧散してしまい、この世界を歩み始める。

二人は寂れた感じの村の外へ出た。村の外は荒れ果てた荒野になっている。緑などというものは無く、ほとんどの生命が消え失せた大地が続いている。他のプレイヤーはおらず自分たち二人だけだ。

「俺まだアーティファクト持ってないけどモンスターは倒せるのか？」

江坂は横を歩いている仙波に質問する。しかしこの荒野には何も
ない。その名の通り、荒れ果てた大地が延々とあるのみ。それほど
遠くない位置に山肌がむき出しになった決して高くはない山がある。
その頂上に鳥居らしきものがうつすらと確認できた。この褐色や土
色などの地味な色が溢れているこの場に赤いそれはそれなりに目立
った。あれが目的地なのだろうか。

「初期装備があるでしょ。ここは初心者にぴったりのフィールド
だし。えっとステータス画面を見てみて」

どうやら江坂の予想通りらしい。仙波はその山へと足を運んでい
る。

「どうやって見るんだ？」

「ステータス画面を見たいって思えばいいの」

江坂は少し不安になりながらも彼女の言うとおりに念じてみると
目の前に一枚の板らしきものが現れた。薄さはほとんど無いに等し
い。パソコンで何かしらの情報を表示する際に画面上に現れるウイ
ンドウそのものと言った方が正しいだろうか。それには自分の名前
がH I B A N Aと表記されていて、現在のレベルや装備、自己紹介
文などといったものが表示されている。

「キャラの名前ってローマ字表記なんだな」

「うん、エンシェンティアは全世界でできるからオンラインモー
ドで外国人と一緒にやることも珍しくはないんだよ。だからファ
ーストネームをローマ字表記にしてるんだ。だからここじゃ他のプレ

イヤーをファーストネームで呼ぶのが常識なんだ」

「ふーん、そうなのか」

江坂は画面をスクロールさせていき、ある程度の現状を把握する。当然ながらレベルは1。初期装備は大剣のアーティファクトらしい。やはり初期装備の定めなのかこれといった特殊能力のようなものは無かった。

「さ、緋花。初陣だよ」

何の脈絡もない仙波のその言葉に首を傾げた江坂だったが、すぐに理解が追いつく。ヴォンという独特な効果音と共に宙に青い文字が浮かび上がる。

~ Battlefield development ~

バトルフィールド展開。

RPGなどのゲームではもはや醍醐味の定番と化したであろうモンスターとの戦闘。それが始まる合図である。江坂は戸惑いながら仙波の方を見るが、彼女は笑って親指を立てるジェスチャーをした。すうっと浮かび上がってきたのは緑色のゼリーののようなモンスターだった。目がくりくりとしていてモンスターと言うよりはマスコットのような愛嬌のある姿だ。

「よし」

江坂はある種のケジメがついたのか、短く息を切って右手で前方の虚空を掴むと、思い切り腕を振り払った。

アーティファクト
虚空が閃光が吐き出しながらプレイヤーに力を与える。彼が掴ん

でいたのは大剣の柄。その武器は両刃で刀身の長さは一メートル強というところか。素朴な造りで一切の装飾は無い。ただ、敵を切るという事より重さによって叩き潰す事に重点を置いた武器は確かに江坂の両手に支えられている。

「おお!?!」

感動と驚きが入り混じった言葉を発した江坂はしかし冷静に緑色のゼリーを見据えた。心の中で弾け回っている興奮を抑えつけて目の前の敵を倒す事に専念する。

躊躇することなく駆け出して一気に緑色のゼリーの間合いに飛び込み、大上段に振りかぶった大剣を気合の一声と共に振り下ろした。

「せやあ!」

渾身の一撃は見事に命中した。ドガッという効果音より少し遅れて緑色のスライムの頭上に赤い表記で74の数字が浮かび上がる。これがダメージ結果なのだろう。緑色のゼリーが消え去ると江坂も閃光を吐き出す虚空へと大剣をしまう。

「緋花凄く凄い! カッコよかったよ!」

「お、おう。でも何かあっけなかったな」

「初めはそんなものだよ。これからが面白いんだから、まだまだ序の口もいいところ」

「そうだな。楽しみで仕方がないっての」

思わず頬が綻ぶ。

何の予兆も無く彼の体が淡く金色に輝きだした。そして軽快なファンファーレと共に彼の頭上に～Level up!～の文字が踊っていた。

「段々慣れてきた？」

「そうだな。戦闘も慣れて来たし結構良い感じ」

仙波の問いかけに江坂は満足げに頷いた。緑色のゼリーとの初戦からしばらくが経ち、江坂はあれからも数回の戦闘を重ねて目的地である山の頂上、そこにある鳥居の前まで仙波と一緒に来ていた。江坂はふと思い立ってステータス画面を見てみた。

そこには先程とは違う箇所がある。レベルの欄が1から3へと変化していた。

「これで最後だよ」

仙波は鳥居をくぐるとその先にある石造りの台座へと歩み寄る。そして一步左へ逸れて江坂へと道譲り彼の方へ振り返る。仙波の体で死角になっていて気づかなかったが石造りの台座には宝箱が鎮座していた。江坂は仙波の言いたい事を理解し、まっすぐに台座へと向かう。そして宝箱を開ける。

・取得アーティファクト…耐火の腕輪。

宝箱の中に納まっていた腕輪を取り出した江坂は振り返って仙波

に戦利品を見せた。彼女は破顔して手が痛くならないのかと心配するほどの拍手を送った

「おめでとう！ アーティファクト取れたんだね。じゃあ一旦村に戻ろっか」

「つまり、今みたいにマップをクリアすることでそのボーナスとしてアーティファクトを手に入れる事が一般的なんだな」

「うん、そうだね。マップのクリア条件は今みたいに祭壇にたどり着くとか、ボスモンスターを倒すとかが主かな。他にもイベントやクエストとかもあるけど追々分かっていくよ」

仙波の説明に江坂は理解を深めたようである。現在、二人は最初に訪れた寂れた村で小休憩をとっている。先ほどとは違い、ちらほらと他のプレイヤーが数人いる。

「さて、と。こんなチュートリアルマップなんてもういいから、ちゃんとした冒険に出よっか」

仙波はさらりとそんなことを言った。実際、大したことは無いのかもしれない。しかし江坂にとっては充分過ぎる程の衝撃を与える言葉だった。しかしどこか納得いくものだ。チュートリアル練習ならば他のプレイヤーがあまりいないのも当然だ。仙波が初見で自分だと分かったのもただここに来てログインしてきたプレイヤーに話しかければほぼ確実に自分だと確定できる。

江坂はいたって冷静を装い。

「だな。ちゃちゃっに行くか」

「むう、そこまでして“自分は驚いてませんよ”アピールはしなくてもいいんだよ？」

しかし、幼馴染で、一人っ子の江坂にとって姉のような存在の彼女には何の意味もなさなかった。



江坂がエンシェンティアを始めてから三日が経過した。桜が散り、段々と暑くなり始める今日この頃。空は澄み渡る青色で陽の光は夏の到来を暗喩しているようだ。

しかしそれは現実であり、今江坂が存在しているとある大厄災によって一度文明が滅びたという設定の中の世界では、しとしとと、まるで空が赤子のようにぐずっている。

「せやあ！」

江坂は両刃の大剣のアーティファクトを縦一文字に振り下ろし、それから腕の力をフルに使って自身の武器を振り上げてさっきとは反対の刃で子牛の姿をしたモンスターを切り伏せる。あっけない。という言葉がぴったり過ぎるほどに戦闘は終わってしまった。

今、彼の傍らに幼馴染であり姉のような存在の少女はいない。毎日、ゲームができるほど誰も彼もが暇ではないという事だ。江坂も三日ぶりにこのゲームにログインしたのが現状だ。

閃光を吐きだす虚空に大剣をしまいこみ、冒険を再開する。

一人、というのもどこか物寂しいものがある。確かに今みたいなソロプレイという遊び方もあるにはあるが、やはりこのゲームは友達と共にやりこむからこそ面白みが数十倍にも膨らむのだろうと江坂は予測する。

いよいよこのマップも大詰めといったところか。ここのマップは一番初めに行ったマップのクリア条件とは違い、ボスモンスターを倒してこそクリアが可能になるのだ。

「よし、かかってこい！」

変わらずに赤子のようにぐずっている曇天。時たま凄まじい轟が江坂を揺さぶる。そんな中で彼の前に立ちはだかったのはつい先ほど撃破した子牛のモンスターが成長したような姿だった。体長は江坂の四倍はあるだろう。螺旋状に捻じれた二本の角がこいつの攻撃力を如実に表している。江坂は大剣を構える。

その猛牛の雄叫びは自身を奮い立てるものなのだろうか。そんなものは江坂には知る由もないが、猛牛が一直線に突進して来ているこのまま行動を起こさなければ危ないことだけは明確だ。

江坂は素早く身をひるがえして右へと避ける。そしてすれ違いざまに大剣で斬りつけると猛牛のすぐ傍に赤い数字で22の数字が表示された。

「があっ!？」

敵わない相手ではないと理解したところで、僅かな隙が生まれた事を理解した瞬間に背後から衝撃を受けた。例えるならば不意に誰かに背後から押されたような、そこまで大したものではないし痛みもほとんど無かった。

だが彼の傍に赤く表示された270という数字。彼の最大HPは500。実に半分以上が削れたことになる。

「……やべ、回復アイテムっと」

江坂は左手だけを大剣の柄から離してただ自然に手のひらを上に向けると、彼の手の中に透明な瓶に納まっている青い液体が握られた。瓶の栓を外して中身を一気に飲み干すと彼の傍に青色で100の数字が表記された。自身のHPを回復するためのアイテムなのだろう。

猛牛の動向に気を配りながら同じ行程をもう一度踏む。これなら一撃死は何とか免れることができるはずだ。それに、分かりやすい事にこいつの動きは真っ直ぐに突進することがほとんどだった。驚異的な速さにさえ気をつけていれば、勝てない相手ではない、と江坂は冷静に分析する。

そこからの戦いは拮抗していた。

江坂が攻撃しては猛牛からの反撃が来る。HPが無くなりそうになれば回復アイテムを使う。同じ繰り返し作業にしかし、江坂には飽きなど来なかった。いつ倒されるか分からない緊張感が彼を極限に集中をもたらししていた。

そして、その時はやってきた。

江坂が無我夢中で放った大剣での一太刀が猛牛の頭部に直撃したのを皮切りに荒々しかった猛牛の動きがピタリと止まり、すうっと消えていったのだ。

「ハア、ハア……勝った」

~Level up!~

江坂の体が黄金に輝いてレベルアップしたことを知らせる。そして数秒するとまた彼の体が黄金に輝く。

「よっしゃ！ 一気にレベルが上がった！ これで10か」

長時間の戦いの疲れはどこへやら。江坂は足取り軽く目の前に出現したクリアボーナスである宝箱へと近づいて、蓋を上押し上げた。

・取得アーティファクト…フレイムブレード

マップのクリアボーナスを手に入れた江坂は街へ帰還する、と念じる。ただそれだけで彼の周りには橙色の輪が江坂を取り囲むように出現し、彼をこの場から離脱させた。



このエンシェンティアには街がある。

いくら屈強なトレジャーハンターと言えども根本は人間である。そんな彼らが旅支度、休憩するための場所である。プレイヤー間ではタウンと呼ばれており、マップやダンジョンとは違い、バトルも無く、ゆつくりとした雰囲気があるからなのか、誰からも愛される場所となっている。

そのタウンの中央にある噴水広場。デザインが凝られた噴水がいくつもあり、初心者はこのグラフィックの流麗さに必ず感嘆の声を漏らすという噂付きの広場はしかし、タウンの外と中とを自由に行き来できる唯一の入り口となっている。そして広場の中央、つまり真正正銘タウンのご真ん中には巨大な蒼い宝石が浮いていた。

これが転移装置、テレポートでマップやダンジョンにトレジャーハンターを転送させる優れ物である。

プレイヤーの往来が激しいここで虚空に橙色の輪が水平に縦一列で現れる。つまりプレイヤーがタウンに帰還してきたということ。

「よし、アイテムでも買って次のマップにでも行くかな……」

マップから帰還した江坂は橙色の輪から解放されて、一歩前に足を踏み出したところで、急に動きを止める。

「ちー姉からメール？ 今日ではエンシェンティアできなかったんじゃない無かったのか？」

江坂が言っているのはゲーム内専用のミニメールだ。宛先にプレイヤー名、内容を書き込んだら簡単に相手に届くものである。江坂がミニメールを見たいと念じると、彼が手を軽く伸ばせば届く程度の前方にステータス画面と同じようなウィンドウ現れた。それをタッチして操作して幼馴染から受け取ったメールを開く。

『やっほー緋花。今エンシェンティアやってるよね？ 一旦ログアウトしてゲーセンのカフェに来てくれない？ 一緒にバトルモードやろうよ。〇。』

幼馴染からのメールはこんな文面だった。何で自分がエンシェンティアをやっているのかを向こうが知ってるのか気になるが、あとで訊けばいいだろうと江坂はそう考えた。

そして江坂は仮想空間から離脱する。

「あ、来た来た」

ゲーセン内にあるファーストフード店で買ったと思われるコーラを片手に持っている仙波は上階からエスカレーターを使って下りてくる江坂に手を振った。それに彼は気づき小さく手を振りかえす。

学校帰りの学生たちがそのままここに立ち寄っているのか、江坂と同年代ぐらいの学生服を着た人が大勢いた。江坂もその一人で、今日はテストで午前中に学校が終わったからここにいると言っている。いつもならまだ掃除をしている時間帯だろう。

「んでさ、バトルモードってのは……」

江坂は彼女が座っている二人用の座席のもう片方に腰掛ける。仙波はコーラをちびちびと飲みながら応える。

「緋花の思ってる通り他のプレイヤーとバトルだよ。経験にはいいんじゃないかな。どうせ遅かれ早かれ、いつかはやるんだし……うわっやっぱ炭酸無理！ 緋花はよくこんなものを飲めるよね」

口をすぼめ、眉間にしわを寄せている仙波をいたって平常に江坂は言葉を口にする。

「じゃあ何で買ったんだよ……」

「え？ いや私も新しいジャンルの飲み物に挑戦しようかと思っ
て、ね？」

緋花は彼女のペースに話を乗せられていると気づいた。さっきとんでもないことを仙波は言ったはずだ。

「ちょっと待て。俺はまだレベル10だぞ？ 他のプレイヤーとなんて無理に決まってるだろ……」

「もう、緋花はそーしょくけーだなあ。対戦にも不公平が生じないようにLV制限とかは設けてるんだよ？ だからレベル10に近いプレイヤー同士で対戦することもできるんだって」

「そっか、ならやってみようかな。ところでちー姉、草食系の意味知ってるか？」

「え？ 臆病って意味じゃないの？」

「いや、それはそれで合っているんだけどさ……もういいや」

いつものような事だ、と割り切って江坂はバトルモードとやらをする為に立ちあがって、仙波を早く行こうと促す。彼女はコーラに苦戦しているようで途中で諦めたのか、まだ中身が半分以上も残ってるファーストフード店のロゴがプリントされた紙コップを江坂に手渡した。



仙波はひたすらエスカレーターで上階を目指す。江坂はその後に着いていく。現在は8階。このビルの形をしたゲームセンターの最上階だ。

「ここ。さ、入るよ」

彼女が促した先のドアは既に開放されていた。どうやら常に開かれているらしい。

今、江坂の先に広がっている光景は人の数が途轍もなく多いというものだ。かなりの数のプレイヤーが常時開放されているドアの先に広がっている大規模のホールに集まっている。

「おい……ちー姉、もう人が一杯一杯なのにこの中に入れと？」

「大丈夫大丈夫、混んでるのは外側だけだから」

5桁近い人数は収容できるのではないだろうか。下層にあるエンシェンティアのプレイルームは細かく区切られているので、このように一つの広間にまとめられると余計に広く感じるのかもしれない。しかし物凄い人数だ、と江坂はそう思う。今は人ごみを割って入らずに広間の入り口で待機している二人である。

これまであの狭い部屋でしかこのゲームセンターで遊んだことは無かった。大人数がいるのはネットゲームの中だけ。江坂が無意識の内に抱いていたそんな思い込みは容易く破られたのだった。

「えっと、左側から順にレベル1～50で、真ん中が51～100、右側が100～250までだよ」

「それって、さっき言ってたレベル制限の話しだよな？」

「そうそう、緋花は左側だね」

「なんで……」

「そこまでレベル差があるのか？」

仙波に見透かされたからだろう、江坂は言葉に詰めた。ふふん、

と得意げに鼻を鳴らした仙波は人指し指を立てて言葉を発する。

「レベルなんて形だけのお飾りなんだよ。例えどんな強敵でも、勝ち目が無いとしても、アーティファクトの相性や属性、アーティファクトの応用の仕方、その時のコンディション、他にも様々な要因が重なり合ってるから決定した結末なんて存在しないんだから」

江坂は黙りこむ。仙波の言う事が正論だと理解したから。本当に自分が世界の中に入ってしまったような感覚、全く先が予想できない真剣勝負、それらに憧れてこのゲームを始めたのに、いつの間にかそれらを否定して臆病になっている自分がいた。

「分かった、やるよ。でもさレベル制限があるってことは俺とち姉は直接バトルはできないんだろ？」

「そうだね〜でもいいじゃん。じゃあ行こうか」

仙波は軽い調子で割り切ったようで早速、目の前に広がる人ごみをかき分けて前へと進む。その切り変えの速さも変わらないな、と思いつつ江坂もまた続く。

「ここにいる人たちはほとんど観戦目的だから気にせずに行っていくよ」

そう言って仙波は人ごみの中へと紛れてしまった。江坂も左の方へと進路を取り進んでいくと、段々と人ごみが少なくなってきた。前方の少し足場が高くなっているステージには、エンシェンティアをプレイする時に座る座席が10台、円形に並んでいた。その傍にはもはや当たり前前のマナーとなっている順番待ちの列ができている

「どこが列の終わりなんだ？」

観戦客と順番待ちの列が混ざって、一目見ただけでは分からない状態だ。数十秒かけて列の最後尾を特定し、江坂はそこに並ぶ。座席の数からして1対1ということはないだろう、と江坂は予想する。どうせなら10人同時の乱闘形式のようなものか。

少し上を見上げると、現在の対戦がリアルタイムで観戦ができる三つの巨大モニターがあり、それらは横一列に並んでいる。レベル制限によって分けられている会場の数にモニターの数を合わせている。モニターの向こう側では大小、形状、能力様々なものが飛び交って乱戦を繰り広げていた。

あるプレイヤーは剣を振るい、また一方のプレイヤーは銃器で応戦したりと江坂の予想通りに十人同時で対戦を行っている。さながら昔に流行った格闘ゲームみたいな感覚だ。洪水、爆発、落雷、様々な自然現象が暴れ回っているのもこのゲームならではのだろう。

古代文明の知識は現代では手の届かない遙か先にある。発生原理なんて無視。超常能力同士のぶつかり合いだ。その古代文明の遺産が何で腐るほどあるのか？ そんな些細な事を気にするやつなんかない。これはゲームだから楽しまないと損だから。

江坂がそれらに魅入る事、約30分。数回ほど順番が交代し、ついに江坂の順番がやってきた。

江坂は少し高いステージに上る為に階段に足をかける。三段しかないなので階段というよりはステップといった方が適切なもののはしかし、江坂を緊張させるには充分だった。はやる心臓の鼓動が周りにも聞こえてるかもしれない。そんな事を考えてしまう。

前方の2個前のステージ、つまりレベル100の上級者同士が対戦する場所には仙波が立っていた。彼女も今から始めるようだ。そして仙波は柔らかに微笑んだ。江坂の中で馴染みのあるその笑顔は、それだけで彼の緊張が消え失せた。

江坂は頷き、座席にどかりと座り込んで目の前にある機械にプレイヤーカードを挿入した。この操作はオンラインモードと変わらない。さっき観戦してて良かったと素直にそう思う。観戦していなければ、ここであたふたして注目の的になっていただろう。すると座席の上の屋根がゆっくりと降りて来た。さながら、ロボットアニメのコクピットのようなのだ。

「さあ、準備はいいですかー！」

マイクによって拡声された声は女性のもの。屋根、というよりは前方を覆うカバー閉じて行く中で、江坂はエンシェンティアのスタッフの証明となるユニフォームを着ているゲーム司会の女性がそう言ったのを聞いた。彼女は円形に10台並んでいるコクピットの中央にいる。

目の前はカバーに覆われ黒一色となったが、見上げればこの広場の天井が見える。何かトラブルがあった時の為にあってここをあけているのだろう。そして目の前に浮かび上がるのは~Welcome to the world of ancientia~の口

グイン成功の文字。

そして江坂の意識は堕ちていく。



木村^{きむら} 春奈^{はるな}はアルバイトをしていた。時給950円なんてバイトはそうそう無いし、しかも採用条件はエンシェンティアのプレイ経験があり、レベルが200越えのユーザーと来たもんだ。これは行くしかないと思断即決。現役大学生の彼女の夢は大好きなこのゲームに携わる仕事がしたい。それだけで大学も決めた。

そんな経緯で木村は現在、エンシェンティア^{このぼし}孤之葉市のバトルモード、レベル1〜50の司会を務めていた。初心者プレイヤーが集まるこの会場だけど木村は特別嫌な気はしなかった。ここからまたランキング上位に名を輝かせる者が表れるかもしれない。そう考えるだけで観戦オンリーのこの立場も悪くは無い。それにスタッフのユニフォーム可愛いし。

このバイトを始めてから早一カ月。どんな振る舞いをしていけば初心者なのかそうじゃないのかのボーダーラインはある程度分かっていたつもりである。その経験からしていえば今回はド素人のプレイヤーがいる。背が高めで高校生ぐらいの男の子。がちがちに緊張してるけど初めはそんなもんだよ、と心の中で賛辞を送っておく。その男の子がいきなり微笑んで頷いてた。

——え？ 新手のナンパ？ めっちゃカッコいいんですけど。
なんて思ってる間に、ごく自然に後ろを振り返ると黒髪ショート
の女の子がいた。この子もはにかんでる。

——結構可愛いし。あーそうですかそうですか。春は過ぎた
ばかりなのにあなた達はまだ春真っ盛りですか。お姉さん羨ましい
ぞこの野郎。

そしてコクピットが閉じて10人のプレイヤーが仮想空間へと行
った。今回も誤作動やバグは無かったようだ。万全のセキュリティ
を持つこのゲームがそんな事態に陥るなんて聞いた事はないし、先
輩からも万が一、億が一ぐらいに気を留めとけばオッケーみたいな
感じだった。

『あ、あゝこちらシステム管理室へ木村春奈、聞こえてるか？』

極小ヘッドセット型のマイクは実は無線通信も行える優れ物。そ
れから通信が入った。エンシェンティア用に独自の改造を施してい
るそれはマイクの近くにあるスイッチを操作するだけで、簡単に会
場のスピーカーからシステム管理室へと切り替わる。木村の心のス
イッチも仕事モードに切り替わる。

『はい、こちら木村春奈です。どうかしましたか？』

『何といふかな……誤作動？ バグ？ どっちでもいいけどさ、
それが発生したから至急発生元のコクピットとプレイヤーの安否の
確認よろしく。今からデータ送るから』

そう言って一方的に通信が切られた。

———マジッすか。



江坂もといエンシエンティアのプレイヤー、ヒバナは樹海の木のように乱立する高層ビル群の間にある大通りに突っ立っている。今までのような冒険ファンタジーではなく、近未来都市のような場所だ。

「ここが対戦フィールド？」

さっき観戦していて分かっていることはバトルが始まった以上、不意打ちやその他諸々、どんな戦略を使ってもいいから敵を倒せばいいらしい。そして10人の内の最後の1人になるまで勝ち抜けばいい。

よってビルの陰からいきなりアーティファクトの攻撃が飛んできても文句は言えない。だからヒバナは虚空を掴む。そして自然に振りぬくと、そこから閃光が迸り大剣が姿を現す。

「戦闘を避けて最後まで力を温存するか、初っ端から仕掛けて戦闘のペースをこっちに引き込むか……」

これからの事を思案していると、真正面にある交差点。信号の命は消えている。

その右側からプレイヤーが出て来た。一気に緊張が走り抜けるがそれを押し殺して急いで大剣を構えた。向こうも気づいたらしい。バックステップを踏んでヒバナから距離を取りながら右手を前方に突き出す。桃色の髪を二つ括りにしてその鮮やかな色と同色の着物を着ているプレイヤーだった。そしてこのプレイヤーをヒバナは知っている。

「……ちー姉？」

「ひ、緋花？」

ついさっき、二人が闘うことはないと確認しあったばかりだったが何事も予定通りには運ばないものなのだと、江坂は呆れ返った。

エンシェンティア経験者、それも上級者といっているいい仙波は混乱している。何で江坂がここにいるのか。ゲームにログインする直前に見た時、確かに彼は違う会場のコクピットを使ったはずなのに。

『どうも！初めまして……。この放送はエンシェンティアシステム管理室よりお送りしております』

声が出た上を見上げれば青い空。これがテクスチャやパターンを使用しただけのグラフィックとは思えないほどの天空が広がっていた。

頂点(前書き)

~
T
o
p
r
a
n
k
e
r
~

頂点

バトルモード。

他のプレイヤーと闘い、力を競い合う格闘ゲームの側面を持ったエンシエンティアの遊び方の内の一つである。

そのエンシエンティアによって展開された仮想空間の中で、異例のトラブルが起こっていた。

「システム、管理？」

仙波

千鶴

もといエンシエンティアのプレイヤー、チヅルはどこからともなく聞こえて来た放送に理解が追いつかないでいた。今までシステム管理なんてものが介入してきた事なんてなかった。それがエンシエンティアのセキュリティの高さと安全性を裏づけていてプレイヤーが安心してプレイできる要因の一つだ。

エンシエンティア初心者でチヅルにとって幼馴染で弟のような存在の彼がこんな上級者用のバトルフィールドにいるのはそれが関係しているからなのか。いや、それしかない。

『ちよいと今はバトルは起こすなよ。今まで出てこなかったシステム管理がでてきたって事はそれなりの事態ってことは理解できてんだろ？』

『ちよつと先輩！ そんな口の利き方は色々マズイですって！』

『たかが新入りは黙ってろ』

どこからともなく聞こえてくる二つの声はまるで漫才をしてるかのように感じるがあちらはあちらで混乱しているのだらうと仙波は勝手に決めつけた。そしてほぼ確定的であるこのトラブルの当事者、ヒバナの方を見た。傍から見た限り彼もまた緊張しているようだ。

『結果から言うとな、レベル1～50のエリアでバトルするはずだったプレイヤー、ヒバナがレベル100～250エリアに乱入してしまった。現在、ヒバナ君の肉体が安全だという事はこちらのスタッフが確認している。このままゲームを続けてもらっても問題は無い。それは俺達が保証しよう。しかしここでヒバナ君には選択肢が二つある』

最初に発言したシステム管理者は一息おいた。忠告をしていた方の声はもう聞こえない。

『まず一つ目、このまま現状から離脱して本来するべきエリアでゲームをする。もちろん次のゲームは君を最優先にすることも約束する。二つ目、このままここでゲームを続ける。即行でゲームオーバーになっても知らないがな……どうする？』

仙波は江坂を見ている。彼は顔を伏せているのでこちらからは表情は見えない。しかし、仙波には分かる。ヒバナは今最高に楽しんでいると。

「じゃあ、エリア変えてもう一回するのも面倒くさいし、このままここでやるよ」

ヒバナの回答に会場は息を呑んだ。今の言い方はまるで、面倒くさいから、ただそれだけで猛者が揃うここへと喧嘩を売ったに等しい。そう捉えられてもおかしくはなかった。

『そうか、んじゃ精々気ばれや』

そう言って放送は切られた。と同時~battle start
!~の表示が目の前に現れる。

「あゝあ、言っちゃったね。断つとくけど、手伝わないからね」

「上等だって。最後に戦おうぜ」

突如、江坂の背後にそびえる一際背の高いビルが一瞬にして爆砕。その結果として無数とも言える破片と炎が江坂と仙波に牙を剥く。あまりにも唐突な他者の攻撃に江坂は反応が不可能だったが傍にいた少女は違った。彼女は普段とは真逆の冷え切った声で呟く。

「……ブロック」

二人の前方には巨大な青い有色透明の障壁が張られ、その殺傷力を封じられた。続けてビルは火災を伴って崩落が始まるがその余波も仙波が展開した障壁がことごとく無効化していく。今の江坂の理解を遥かに超えた攻防に彼は啞然とする。

「そいつが乱入者か？ 本当に初心者なんだな」

ほんの数秒で崩落が終わり残骸となった瓦礫の山は未だに黒煙を

吐いている。吹き飛んだ棒状の建造物。その黒煙の向こう側から一人のプレイヤーの影が見えた。

「邪魔」

桃色の着物が翻る。下駄がカロン、と軽快な音を奏でた。江坂が瞬きをして視界を確認した時には傍にいたはずの仙波が男性プレイヤーの背後、黒煙の中に悠然と立っていて、そのプレイヤーは脱落していた。

「邪魔が入ったな……なんだっけ？ ああ、最後に戦おうだっけ確か。別にヒバナみたいな雑魚を相手にしてたら弱い物イジメのレッテル貼られそうだから相手にはしないけど、調子に乗ってたら狩るよ？ それにヒバナを助けたんじゃないくて、自分の身を守ったらたまたまヒバナまで守っちゃっただけだから」

黒煙が立ち昇る中で桃色の着物を着た幼馴染は既に冷酷な戦乙女のような敵となっていた。
走った。逃げる為に。



「あゝあ、行っちゃったか」

仙波は分かり切っていた事に落胆する。

初心者に思いつきプレッシャーをかましたらほとんど逃げ出すのは明白。ほんの悪戯心でからかってみただけで結果は予想以上。あ

とで謝ろう、と仙波は今後の予定を一つ追加した。

「……今日は上機嫌だな」

「あ、カイも同じバトルだったんだ」

仙波は右隣に現れた少年のプレイヤーに嬉しそうな表情を見せる。カイと呼ばれた小柄なその少年は黒いコートを着ていて襟を立て、口元をそれで隠している。

「弟っていうか幼馴染がエンシェンティア始めてさ、今からかったんだけど、予想以上に驚かせちゃった」

「……あの初心者か。それにしても何を考えてるか分からない……なぜこのままプレイしているんだ」

カイは心底納得いかないといった様子で、それをみた仙波は楽しそうだった。

「きつとね、その方が楽しいからだと思う」

江坂の理解者は友人にそう言った。

江坂は跳ねる心臓を落ち着かせるために深く息を吸い込んで吐き

出す。ゲームの中でも現実のような疲労感があるのはかなり新鮮だが、これがエンシェンティアだ。それに、信じられないがここまで全力で走った距離は1キロを軽く越えてる。

「はあ、はあ……ふう」

先程の事を思い出す。仙波は本気で自分を倒すつもりだったはずだ。あの気迫は本物だった。

「カッコ悪……」

結果、逃げ出す始末だ。

大剣のアーティファクトを支えにして立ちあがると前方にプレイヤーがいるのに気がついた。一度だけ大きく跳ねる心臓に気づかないフリをして己の武器を構える。

「ああ、君が例の初心者？　格好をつけたいがためにここに残ったガキ？」

白いコート、眼鏡をかけていて理知的な印象を持つ男性プレイヤ―だ。江坂の事を子供呼ばわりしたが、彼もまだ高校生あたりだろうと江坂は思う。

「……それが？」

額に青筋を浮かべる江坂は大剣を握る両手に力をこめる。いつでも動けるように腰を深く落としておく。

「ヒバナ……だっけ、君。僕はソウイチロウ。僕はお前が気に入

らないから倒す。オーケー？」

白いコートをはためかせ、愛想の良い笑顔を浮かべながらソウイチロウは一步を踏み出す。

「無敵のアーティファクトって知ってる？」

「俺、まだ初心者だしそんなもんは知らないって」

「そうかそうか。今日で始めてから何日？」

「三日だけど」

江坂がそう答えた途端にソウイチロウから表情が消えた。そして何の前触れも無くサッカーボール大の氷塊が江坂に牙を剥いて来ていた。驚く間も無い。かろうじて大剣の腹で急所だけはガードする。

「ここは間違ってもそんなヒョッコが来ていい場所じゃないんだけどな」

「それって差別か？」

「いや、区別だよ」

大剣を握る両腕に全力を込めると江坂は大剣を脇に構えて真正面から特攻をかける。さっきの仙波に比べたらこいつは可愛いものだと思う。

それに対してソウイチロウは二度氷塊を放つ。その塊は球状とい

う型をもって弾丸のごとく再び江坂に襲いかかる。腹の大きい白刃が二閃。敵が放った飛び道具を斬り伏せた江坂は立ち止まること無く前へと駆ける。

しかし一度潜り抜ける程度は相手も予想通りだったようだ。第二射の水塊が既に飛来してきている。

「疾っ！」

短く息を切った江坂は目前に迫った水塊を前に踏み出した右足を軸に体全体を時計回りに回す事で回避し、その先に迫って来ている二つ目の攻撃に、回した体の勢いをそのままに大剣で横一閃に叩き斬る。

得も言えない高揚感。鼓動がドクドクと脈打っている。目線だけをソウイチロウに向けると次射が五つ。まだ勝負は始まったばかりだ。

「ヒバナ、ノッてるな」

大きさ一メートル強の白い折り鶴はその背中に自らの主、仙波を乗せて青空に滞空していた。そして彼女は高見の見物に洒落こんでいる。傍に滞空しているもう一つの折り鶴には友人のカイもいる。

「バトルセンスは中々、悪くない……むしろ初心者で二割程度の“傀儡師”^{くぐっし}を相手によくやっている」

「でしょでしょ。私から逃げ出した時とは別人みたいだよ」

「……どこまで保つか」

フン、と鼻を鳴らした黒衣の少年カイは地上を見下ろす。現在の生き残りは十人。まだまだ結果は分からない。

「ねえねえカイ、ヒバナが勝つ確率は？」

「0」

「じゃあ“オーバードライブ”は？」

「……轟肩は止めておけ。仮にできたとしたら0.01だ」

「轟肩、は否定できないかもだけど絶対にヒバナはトップランカーになる。現ナンバーワンのカイと張り合えるように絶対になる」

「そうだな……それが轟肩だ」

「さっきの無敵のアーティファクトってやつ、使わないの？」

何個目になるか分からない程、敵の飛び道具を斬り伏せた。状況は拮抗。しかしそれが仮初なのは江坂自身がよく理解している。相手はレベル100を超える上級者なのにたかがレベル10の自分がロクに戦えてる事がおかしい。つまり全力で手加減されている。

「僕が所持しているとは言っていないけどね」

「何か自慢したいような口ぶりだったからさ。自慢したくてもその相手が元ネタを知らないんじゃない、くどくど説明しなきゃいけないだろうから面倒くさくなっただろ？」

「うん、その通りだ。心でも読めるの君？」

江坂の周りの地面に影ができた。直径三メートル程度のそれは秒を刻むごとにその面積を増していく。江坂が事態を理解した時には遅かった。巨大な氷柱が江坂のいた地面に深々と突き刺さり、削岩機のごとく地面を貫きながら舗装された道を砕いていく。

大きな痛手を負ったと考えるのか、直撃しなかっただけマシと考えるのか。江坂は後者だった。

「ちっ」

嫌悪感を露わにするソウイチロウ。今の奇襲で決着をつけるつもりだったのだろう。

「しぶといね、まるでゴキブリだ」

「ちっ」

今度は江坂が舌打ちをする。

「このゲームは楽しくやるもので、差別するためのゲームじゃないだろ」

ソウイチロウは眉間にしわを寄せて上空から氷柱を複数落下させ

る。無造作ではなく一本目の氷柱を突破すると間髪いれずに二本目、そしてそのあとの追撃が他の退路を封じるように計算されつくして配置されている。しかし江坂は完璧とはいかないが氷柱を避け、大剣を盾代わりにして防ぎきる。

「差別と決めつけられるのは心外だね。それに他人に自分のプレイスタイルをとにかく言われる筋合いも無い。ましてや格下の初心者に」

「最後の一言が余計ってね」

落下してくる氷柱に狙いを定めて、野球の要領で大剣を振る。大剣の腹に当たったそれは一直線にソウイチロウに向かい、氷柱は彼の頬を掠めてゆく。

「ああっうざったい！」

「……………分かった。俺もあんたが気に食わない。だから倒す。オーケー？」

大剣を右肩に担ぎ、左手でソウイチロウに指をさしながら江坂は公言した。経験もステータスも武器も、何もかもが劣っている自分が熟練者相手に勝つと公言してしまった。

「ハハっ、そうかそうか。なら来なよ雑魚。ランキング9位“傀儡師”ソウイチロウが相手してやるよ」



「盛大に……喧嘩を売ったな」

黒衣の小柄なプレイヤー、カイは無感動のその双眸で眼下繰り広げられている出来レースを見つめる。

「あっちゃあ……」

江坂の幼馴染の仙波もとい、チヅルも頭を抱えている。世の中にはやって良いことと悪い事があるが、江坂がやったことは間違いなく後者。しかもゲームの外では大人数の観客がいるので会場は今頃、炎上してるだろう。明日辺りにはBBSとかも炎上していそうだ。もう取り返しがつかないし仙波一人にどうこうできる問題でもない。ここは大人しく見守るのが彼にとって姉のような存在の自分のできることだ。

「まあヒバナなら何とかするかな」

眼下では江坂が全力でソウイチロウから逃げている。都会のど真ん中、片側四車線程度の道路から狭いビルとビルとの狭い路地のようなところに入って敵が放った氷柱を避けた。

「しかし今のままでは勝機は確実に0だ」

上空からなら正確かつ迅速に状況が把握できる。さらに言ってしまうばここから奇襲をかければ江坂もソウイチロウもこの二人に秒殺されてしまうだろう。それをしないのは、

「まあ、それをどうやって可能な限り引き上げることができるか、だよね」

この二人が傍観者という立場で納得してそれを最大限に利用して敵を測っているから。すなわち。

「ここから南……脱落者だ」

江坂とソウイチロウの勝負だけにかまけているだけではない。カイがそう呟いたあとに彼らがいる場所から南の方向から爆音が発せられ、巨大なキノコ雲が発生する。

「うわぁ、派手だね」

「……あいつが乱入して十一人から始まったから、残り九人か」

「十人じゃないの？」

「さっき倒されてた。見たこともないやつだったな」

「それよりさ、ほら、ほら見てよカイ」

カイの説明をろくに聞かずに仙波は瞳を爛々と輝かせて幼馴染が闘っている場所に指をさす。今にも仙波は自分で作り出している折り鶴というこの足場の上で踊りだしそうな勢いでカイの黒衣をひっぱる。

「ヒバナの勝率さ、0.01くらいには上がったんじゃないかなっ！」

信じられない、と代弁するかのようにかいは大きく目を見開き、しばしの間呼吸を止めていた。

江坂は逃げている。背後から迫るのは無数の氷柱と氷塊、それらが地面に激突するたびにガラスが碎けるような音とともに細かい破片が飛び散る。ビルとビルとの狭い路地は一方向からの攻撃しか受け付けず、江坂にとっては有利に働いていた。

「ちつくしょう……」

悪態をついても状況が好転するわけがない。恐らく敵の攻撃が一撃でももらえば即アウト。今は逃げ続けるだけだ。

ヒヤリと背筋に悪寒が走る。それは生物的本能の危機察知能力ではなく、ただ単に江坂の両側に建っている高層ビルが隅から隅まで凍りついていただけだからだ。

逃げ道は今走ってきた後方があるが十中八九、相手ソウイチロウが待ち伏せしているだろう。左右は十数メートル強の壁。残るは前方だけだが、しかしどちらに行くにしても結局窮地には変わりが無かった。

ビシリと音をたてて氷像と化した左右にそびえるビルにひびが入り、ビシビシと建物全体を侵食して崩落のカウントダウンを告げる。今からこの路地を前方に突き進んだところでここから脱することはできないと簡単に想像がつく。

もうすぐ巨大かつ無数の凍結したビルの残骸が降り注ぎ始めるだろう。いつの間にか江坂の足は留まり上空を見上げていた。ビルと

ビルの間から見える青空は綺麗という言葉では役不足なほどに澄み渡っているが、隙間だらけでみっともない天蓋てんがいのように空を塞いでいた瓦礫が降り注いできた。

「っ……!!」

おかしいと思っていた。

もしもここにいる自分が本来の自分のままなら1キロも走り続けるはずがない。無理をして100メートルと少しぐらいだ。その後には腹の中が暴れ回り、呼吸することが苦になるほどの疲労感が来る。だが仙波から逃げるときにそれができてしまった。あの時のようになれたら、なれたら……。

江坂は駆け、跳んだ。足場にするのは崩落を始めているビルそのものではなく、その一部である巨大な瓦礫である。垂直に駆けあがるのではなく落ちて来た瓦礫を踏み台にして上へと上へと駆けあがる。落下してくるビルの一部を貰えばアウト。逆にそれを利用して足場にしてやるのだ。

まるで、いつの日にか、夢をみていた風景が、現実になったよう
で。

自分が知っている漫画やゲームは所詮作り物で、その世界はリアルじゃなかった。だから憧れた。自分が世界を救ったり思いがけない方法で窮地を脱したり、これまたピンチにパワーアップした仲間や主人公が王道よろしくかけつける。

叶わない、だからこそ憧れ、夢に見る。

ならばそれが叶う場所があって、その場所に自分がいて、現在進行形で、崩落して頭上から降ってくるビルの残骸を足場にして跳び続け、ピンチを脱しているなら。

ここに残ると無謀を言った時だって面倒くさいからじゃない。その方が絶対に楽しいと思ったから。抗えない逆境を乗り越えることこそが最高に楽し過ぎてたまらない。そういうのが恥ずかしくて言えなかった。現に今は楽しくて楽しくてしょうがない。心臓は歓喜の雄叫びをあげていて、心は最高にハイに。

また一つ、破片を足場にして駆けあがる。

上から降ってくる残骸の向こう側には限りなく広い空が広がっている。残る残骸は数個程度だった。

そこで江坂は上昇を止めて重力に身を預けて落下を始めた。現在は地上10メートル弱と言ったところか。ハイスピードで迫ってくる凍結した残骸を彼は宙で身を捻って回避する。これで凌ぎ切ったはずだ。遥か上空からの落下だが今の自分ならその衝撃さえも殺すことはできる。そして無事に着地に成功すると江坂はソウイチロウを見据える。

「オーバードライブ？ まさか始めて三日の初心者か？ 信じられない……」

二人の周囲には凍結したビルの残骸が散らばっており、平坦だった地面は積み重なったそれらによって元の面影が全くない。そしてその積み重なった頂点に立ち、肩に大剣をかつぎ、強者を見下ろす弱者の姿があった。

「……ふう。もう終わりじゃないよな？ ランキング9位とやらの“傀儡師”さん」



「……本物か」

「カイ曰く、あれほど出力の高いオーバードライブでも勝率は0.01なんでしょ？ あレベルだと私でもどうかと思うけど」

「当たり前だ。伊達でトップランカーを名乗れるほど……このゲームは甘くはないさ。それにアーティファクトの性能差も圧倒的だ……しかし面白い」

するとカイは今まで乗っていた折り鶴の上で立ち上がる。

「どこ行くの？」

「他のプレイヤーを倒しに行く……あのバトルを邪魔されると迷惑だ」

「行っってらっしゃい」

仙波は隣の折り鶴から飛び降りる黒衣の少年を見送ると、友人が乗っていたその折り鶴を消した。

エンシェンティア狐之葉市、バトルモードの会場はその圧倒的な広さをも埋め尽くすほどの人がいるにも関わらず静まりかえっていた。

原因は第3試合場、レベル100のプレイヤーがバトルするはずのそこに一人だけイレギュラーが混じっているのは既に周知だった。その乱入者が初心者でたったのレベル10で早々に退場してしまうのは自明の理のはずだった。

なのに今の試合状況はどうだ。

ランキング10位圏内の猛者の攻撃を避け続け、あまつさえオーバードライブを発動させてこうして観客や順番待ちのプレイヤー全員の呼吸を奪っている。

レベル1〜50の試合会場の司会を務めている木村春奈は背中に強烈な痺れが奔るのを感じた。それは痛みではなく脳に、自分という存在そのものに、悦楽を感じさせるものだった。

今はアルバイトなんてどうでもいい。今はあの両手でも納まりきらないサイズのダイヤの原石をしかと見届ける必要がある。見届けないければならない。

「早く早く、その次を見せてよ……」

食べてしまいたい。初心者に対する思いやりとかもどうでもいい。ぐっちゃぐちゃにして、それでも執拗に抗ってくるあの子を潰して潰してツブしてツブシテ。

いけない、と思ってすぐに切り替える。そう、半熟より完熟の方がいいに決まってる。だから名前だけは覚えておこう。

ヒバナ。何とも珍しい名前だ。しかし逆に印象が強くすぐに覚え

る事ができた。ああ、いつになったらここまでたどり着いてくれるのだろう。



フリージング・パペット・ショー
「氷像惨劇」——発動」

傀儡師は静かにそう呟いた。それはアーティファクト発動の言葉。江坂は反射的に今いる積まれた氷礫の上からすぐさま退いて、敵から距離を取った。

「オーバードライブを発動するなんてね。謝罪代わりにちよつと本気出そうか」

「オーバー、ドライブ？」

「……知らないのかい？ まあ、知らないのならそれでいいか」

江坂の背後からギシッと何かが軋む音がした。振り向くと氷の人形がいた。顔は無く、四肢が情け程度にある粗末な人形。背丈は江坂より頭一つは小さい。その両腕は氷柱そのもので、手の平は無く刺突にだけ使えるものだった。軋みの音は関節が動いた事によって氷と氷が擦れ合ったために発したのだろう。

その人形が右腕を江坂に向けて容赦なく突き出してきた。眉間を狙ってきたその刺突を江坂は首を左に傾ける事によってかわし、そのまま前へ踏み込んで頭突きで人形の頭らしき部分を砕く。

ギシギシギシ。

まだ一体目の人形を撃破しただけに過ぎなかったようだ。江坂の周囲には次々と先程と同様の人形が生まれ始めていた。

「多対一……か」

「まさか敵の戦略にいちやもんをつける気かい？」

「そんなわけないだろ」

江坂は左側から繰り出されてきた刺突を紙一重でかわして大剣で斬り伏せる。そして勢いをそのままに近くにいた人形二体を屠る。

「こっから楽しくなってくるんだからさ」

「勝手に言ってなよ」

人形はさらに数を殖やし続ける。それはもはや人一人に手を負える規模では無くなっている。

しかし江坂は奮戦する。近くにいる人形を片っ端から斬り伏せて繰り出される刺突をかわし続けるが限界というものがある。どうやっても避けきれない攻撃がかすり傷として蓄積していき江坂のHPを確実に削っていくのだ。

ギリ貧もいいところだ、と江坂は思う。このままでは自分がゲームオーバーになるのが決まり切っている出来レースだ。しかし追い打ちをかけるように。

ビシリ、と嫌な音がした。

その不快感は人形が砕けるものではなく自分の手元から発せられた。江坂が握っている大剣の刃全体に罅ひびが入ってしまった。

「おい、なんだよこれ!？」

「劣化判定を知らないのかい？　アーティファクトを使い続けられはいつかは壊れてしまう。それが劣化判定だ。確率でアーティファクトに蓄積されていって劣化率が100%になれば壊れて無くなってしまう。今の君の武器は劣化率98%ぐらいだね」

「ってことは……」

「残り2%で君の武器は消えて無くなってしまう。まあ、劣化判定ができるのは確率だから、それさえでなければ使い続ける事はできるけど、ゲームにそんな奇跡があるとでも？」

「……………」

そして今更気づいた。自分のHPがほとんど無くてゲージがレッドゾーンに突入してしまっている。今まで運に恵まれて敵の攻撃の直撃はなかったものの、少しずつ蓄積した故にここで響いてきたのだ。これではゲームオーバーが先になるかもしれないという不安を無理矢理振り払って勝つための戦略を必死で練るが、無い。

江坂は苦虫を噛み潰したような顔をしてまた一体の人形を屠った。そして一際大きい軋みとともに大剣の罅が広がる。

「99%」

ソウイチロウのその言葉が江坂に深く突き刺さる。

前方から四体の氷の傀儡が襲いかかってきたのでそれを横一線に迎撃した。周りにはまだ無尽蔵のように氷の傀儡が群がっているが、大剣が砕け、光の粒子となって消えた。



「ファイア」

江坂の周囲に爆撃が連続する。それは氷の傀儡のみに狙いを定めており、江坂とソウイチロウには直撃はしなかった。そして江坂の目の前で桃色の着物が翻る。敵だったはずの彼女は幼馴染のまま少年の眼前で背中を見せて凜と立っている。

「ん、善戦したね。お疲れ様……ブロック」

背後から音も無く近づいてきた氷の傀儡の刺突は青い有色透明の障壁に阻まれた。

江坂が驚いたのは人形による奇襲だが、本質はそこでは無かった。人形の動きが流麗でまるでその道のプロを連想させるほどに鮮やかだったから。自分の時とは明らかに違う圧倒的な差とそれを見もしないで防いでみせた幼馴染。

「何で……?」

「もう我慢できなかったからさ。あとでカイが怒るだろうなあ」

苦笑して仙波は攻撃の命令を自分の折鶴たち^{ファイア}に下す。

「オーバードライブっていうのはね」

仙波はソウイチロウが放った氷柱をことごとく爆砕していく。それは彼女本人が直接手を下しているわけではなく、攻撃は彼女の左右に浮遊している1メートル強の大きさをした折り鶴の頭部の先端から迸る爆撃が行っている。

「いくらでも強くなれるバトルモード専用の補正なんだ。あ、でも幾らでも言い過ぎかな。まあとにかく強くなるっていうのは主にキャラのパラメータの向上だよ。さっきの緋花みたいな感じ」

折り鶴がその数を2から4に殖やす。殖えた分の折り鶴は二人の周囲に展開する氷の大群の駆逐を始めるつつソウイチロウ本人の攻撃を相殺していく。

「その発動条件は思いこむこと。俺は、私は、ここじゃあんな事もこんな事もできる。その思いが強い……じゃおかしいか。純粹であればあるほど比例してオーバードライブの出力は上がっていくんだ」

しかし折り鶴の爆撃の連続よりも傀儡の増殖の方が速さで上回っている。次第に仙波の表情が曇ってゆくが声にはそれを感じさせないほどの明るさが声にある。後ろにいる幼馴染が立ち上がるまで自分が時間を稼がなければならぬ。

「本当の事を言うとか」

360°。全方位を人形に囲まれた。仙波もそれに応じて自分と江坂の周りを8の折り鶴で防御網として囲って応戦する。しかし人形の包囲網は簡単に抜け出せるものではなく、仙波の折り鶴が爆撃を行って幾本の火柱を立てようとも活路は見えそうになかった。

「さっき崩壊してるビルの欠片を足場にして跳んでたよね？ あれね、私でも結構難しいんだよね。あれだけの出力のオーバードライブを維持するのってレベル高いからさ。それをやってのけた緋花は今じゃ有名人。このゲームが終わったらヤバイよ絶対」

いつもとは違う、桃色の着物を着ている幼馴染。その背中がとても大きく見えた。そしていつの間にか消耗してレッドゾーンに陥っていた自分のHPが全回復している。

「でも俺はアーティファクトが壊れて……それに何でHPが？」

「何のためのクリアボーナスなの？」

「は？」

思わず訊き返していた。あまりにも即答過ぎて意表をつかれた。

「緋花のアーティファクトはあんなしょぼいやつだけじゃないでしょ？ さ、ステータス画面からさっさと装備してくれないと私も厳しいんだよね。あと回復は私の出血大サービスだよ。感謝してね」

氷の傀儡の内の一体が防御網を突破してきた。それに気付いた仙波はすぐさま駆けだして回し蹴りで粉碎すると、仙波は9匹目の折り鶴を出現させてそれに江坂を乗せる。そして主の命を受けた折り鶴は真上に上昇していく。

傀儡がここぞとばかりにその折り鶴の跳びかかるが、仙波とそのアーティファクトの折り鶴がそれをさせない。

「ちよっ……何だよこれ！　おい、ちー姉！」

「あゝごめんね。足手まといだからどっか行っというてね」

彼女が用意した唯一の脱出路から見下ろす江坂は、齒を強く、強く、噛みしめる。

「追撃はしないんだね、珍しい」

「優先順位が多少変わったただけだ。結果的に俺が勝つことには変わりないからね」

どうやら江坂と話して彼を逃がしている間にソウイチロウは人形の大群の中に紛れたらしい。彼の事だから今の外見は人形とそっくりにするようなアーティファクトを使って、完全に擬態カモフラージュしているだろう。

しかしそこまで距離は離れていないらしい。会話できるのが何よりの証拠だ。だから仙波は可能な限りの戦力を展開させる。20体の折り鶴が一挙に主を守るように出現した。

「ここからだよ」

意気込んだ仙波の脳裏にしかし、諦めが過ぎる。

今の状況は簡単だった。仙波が現最大戦力を出現させたと同時に氷の大群が糸が切れた人形のように、ドミノが倒しのごとくその場に崩れ落ちたのだ。何事かといぶかしむ仙波の頭上を巨大な影が覆った。見上げれば周囲に樹林のように乱立するビルと同程度の大きさの氷の人形が立っていた。ただ、それだけだ。

「前方展開！」

氷の巨像が右腕を振りかぶった。今から逃げたとしても安全圏には間に合わない。だから20全ての折り鶴を盾として前方というよりもほぼ真上に展開して、防ぎきることに賭けた。

「一つ、質問しようかな」

氷の巨像の主は問いかける。巨像は圧倒的な質量と重量、そして速度という最大の武器を以って拳を振り下ろした。

「それは防御のつもりかい？」

地響きではなく地震が発生した。舗装された道路は毛細血管のようにはびが枝分かれし、拳が直撃した地面にはただ半径8メートル程度のクレーターが残っていた。もちろんそこには誰もいない。傀儡師は全力で敵を倒すことに成功して次の獲物を探し求める。最強の人形を引き連れて。



江坂は仙波が出現させた自分の身長以上はあろうかという折り鶴にまたがっている。ステータス画面を開き、そこから装備一覧の画面を表示させる。

———手に入れたアーティファクトは装備しなきゃ意味ないなんて常識だろ……何やってんだ俺。

武器に選んだのは“フレイムブレード”という大剣型、炎属性付加のアーティファクト。そして“耐火の腕輪”という装飾品型アーティファクト。

このフレイムブレードはそれなりに強力らしく、そのバランス調整のために常にHPが減少し続けるというデメリットも兼ね備えているみたいだ。しかし火属性の耐性を上げることによってそのデメリットが緩和することができる。そのカバールの役割を担うのが二つ目のアーティファクトという事になる。

自分の運の良さに一抹の不安を覚えながらも戦闘準備を終えた江坂は不意に落下した。

それは乗っていた折り鶴が消滅したからだだった。何故消えたのか。想像という補完は意味も無く、ただ重力に任せて落下しながら振り向けば巨大な氷の人形がいる。それだけで大体の大筋は分かる。ソウイチロウが本気を出して仙波が負けた。ただそれだけの構図なのだろう。

もしも仙波が自分に構わずに戦い続けていたら勝っていたのだろ

うか。せっかくのチャンスを自分が無駄にしてしまったのだろうか。氷の巨像がこちらを向いた。目や口などは無く、ただ鼻などの表面上で分かる部分だけが雑把に再現されている人形がこちらに向けて一歩を踏み出した。地面が縦に揺れる。

江坂は何とか落下の衝撃を殺し地に足をつけると敵を見据える。

「やってやる……やってやるさ」

結局、仙波は江坂に託した。それは変わらないのだ。だったらここで立ち止まるより、あいつに勝ってガッツポーズの一つでも見せてやらないといけないのが筋だ。振り返る。目の前には怪獣漫画よろしく巨大な敵だが先程のような人並みの人形はいないようだ。何もトップランカーだからと言って無敵超人ではないわけだ。

戦力差は明らか。だから真正面から戦っても勝ち目は無い。狙うならばこいつを操ってるソウイチロウ本人。江坂は駆ける。遙か前方、氷の巨像の後ろで控えている本体を叩くために地面を蹴った。

「あのさ一応、忠告しとくけど大きいからノロマなんていう先入観は切り捨てた方が賢明だ」

距離が離れているから江坂はソウイチロウが何を言ったのかは聞き取れなかった。瞬間、上方から江坂の予想を遥かに上回る速さで拳の形をした超重量、大質量の氷塊が江坂を狙って落下してきた。

「がっ……!!??」

声にならない声が出ただけだった。一体何の幸運かまた直撃は避けれたがダメージが酷い。仙波に回復してもらっていないければゲ-

ムセツト確実だった。

「ほら、これで終わりだ。ま……頑張った方だと思うよ」

続いて放たれる第二撃。まだ復帰しきれていない江坂に留めにも等しい必殺に対して江坂はそれが直撃するのを待つことしかできない。

——ちくしょう。

心の中で呟く。

——ちくしょう。

しかしそんな都合のいい偶然も奇跡もあるはずがなかった、はずだった。

江坂の視界いっぱいに広がるのは必殺の拳でもゲームオーバーの文字でも無く、狸のようなモンスターの背だった。大きさは氷の巨像の拳と同等程度。その狸がどういう理屈か、腹部を目いっぱい膨張させて巨像からの一撃を防いでいた。

「……は？」

わけが、分からない。攻撃を防いでくれた以前にこいつは一体何者で、どういう目的でこちらを助けたのか。江坂の頭上でクエスチオンマークの往来が絶えない中、ソウイチロウが大声で怒鳴った。

「馬鹿な！ ジャマーモンスターだって！？ 下らない試合ぐら

いさつさと終わらせてくれよ、くそつたれ！」

——ジャマーモンスター？

江坂は内心で首をかしげるがある仮説を作って無理矢理自分を納得させる。“とりあえず、負けそうな奴に逆転のチャンスを与える、ある意味でお邪魔、ある意味で女神ポジションなモンスター”という仮説。これが間違っていなければまだやれる。

氷の巨像の拳を防いだ狸は限界まで膨らませている腹部を次第にしぼませていく。その動作と同時に口から白煙を吐き出した。それが完了すると狸は何処へと消え失せてしまった。

「煙、幕？」

戸惑いながらも現状の把握に努める。

氷の巨像の一撃で負けたと思ったら突如、ジャマーモンスターという狸のモンスターがこの一撃を防ぎなんとかゲームオーバーを免れた。そしてその狸が今度は煙幕を吐き出して格好の逃げ道まで用意してくれたのだ。

しかしとも思う。このまま逃げて勝機はあるのか、と。いつその事このまま特攻をかけるのも一つの手段だ。

「ゲホッ……ただの煙幕じゃないのか？」

周りが煙幕に覆われていて視界がゼロだが、江坂は気づく。この煙幕はただの煙ではなく粉末のような粉が舞っている事で視界を奪っている。粉だから余計に目や喉が痛く感じるのだろう。そして粉という事に引っかけかりを覚えた。

——粉？ 粉末？ 粉塵？

現在、自分が携えている大剣を見る。それは炎属性付加の能力があるフレイムブレードという名の大剣。いける。と判断した根拠は何なのか分からなかった。でも無駄にリアルを再現しているエンシエンティアなら可能だろうとそう思ったから。

まだこの煙幕は広がりきっていないがある程度は霧散している。やるなら今すぐがいいが敵が攻撃してないのにやっても自爆して終わり。ならば誘うしかない。声の限り叫ぶ。

「な、何だよこの煙幕！？ ゲホっ、くそ前が見えない！」

ソウイチロウはいぶかしむ。まさかジャマーモンスターが乱入するとは予想外だった。そしてあの目障りで仕方がない初心者煙幕の中に隠れてしまった。出てきたところを潰そうと考えていたが、向こうは向こうで混乱してるようだ。ならばさっさとケリを着けよう。

氷の巨像に命令を下す。煙幕の中を適当に殴り続けとけ、と。

江坂は耳を澄ませる。欲しい情報はただ一つ。そしてしばらく待てばそれが来た。そこにある空気が圧され、ゴウツという音を轟かせて巨大な何かが迫ってくる音だ。

それを合図に大剣のアーティファクトの能力を起動する。発火。ボウツと大剣の刃が炎に包まれる。途端に炎が煙幕、というよりは粉塵の中を伝播してこの中にある酸素を貪欲に貪っていく。そして江坂は幾度となく繰り返し返される爆発の中で見た。氷の巨像の腕が自分に向かってくるのを。

粉塵爆発。

それは通常のアーティファクトの能力の数十倍の威力を持った現象として、周囲を破壊し尽くす。その対象にソウイチロウが操る氷の巨像の腕も含まれていた。



「このっ……!!」

氷の巨像全体を巻き込むには規模が小さかったため、撃破には至らなかったが右腕の肘から先が消し飛んでいた。怒り心頭という言葉では収まりきらない程にソウイチロウは怒りを露わにする。表情は怒りに歪みきっている。

「お前の負けだな“傀儡師”」

声がしたのはソウイチロウの背後。そこには黒衣を着た小柄な男性プレイヤー。黒衣は擦り切れたコートのように襟を立てて口元を隠している。それに対しソウイチロウはしかし戦慄したように呆然と立っている。

「ランキング一位……カイ」

「分かってる……よな？ たかがレベル10のひよっこにそこまですごいボロボロにやられてるんだ。もし……そいつがもう少しロクなアーティファクトを持っていたら……結果はどうなっただろうな」

「うるさい！ 結果的に今残ってるのは俺だ！」

「結果論じゃ……ないのか？」

ソウイチロウは声に出さず、氷の巨像に命令を下す。徹底的に叩き潰せと。そして破壊された腕とは逆の腕で殴りかかるが、黒衣のプレイヤーは真っ向から右腕で殴り返す。

カイの右腕に装着されているのは甲の部分に加速機のような機構が取り付けられている手甲。ガントレット加速機構が金属を切る時のような不快音とともに一瞬にして最大出力まで上りつめる。そして拳を振りぬいた。

傍からみれば圧倒的な差は真逆となる。氷の巨像の腕が木端微塵に砕け散って黒衣のプレイヤーが残身していた。

そしてカイはソウイチロウの懷に素早く潜り込む。既に手甲の溜めが始まっている。反応が遅れたソウイチロウは一息遅れてバックステップを踏むが間に合わない。自身の数十倍の大きさを持つ拳を砕いた拳が傀儡師に直撃。クリーンヒットそして傀儡師もがこの仮想空間から強制離脱した。

「何で……終わらない？」

カイは疑問を持った。もうプレイヤーは残っていないはずだ。粗方自分が倒したし残っているのは傀儡師と自分だけだったはず。その本人を倒したのにゲームが終了しないのはどういう見か。バグに重なるバグということを疑ったがそうではないらしい。

自然と辺りを見渡してとある一か所に目をつける。それは粉塵爆発という現象があった中心。そこに脱落したはずの一人のプレイヤーがまだ残っていた。

「あれ……何で、残ってるんだ？」

全く、このゲームには疑問が尽きない。倒されたと思ったら何度
も何度でも生き残ってしまう。自分の感覚が狂ってしまいそうだ。
ステータス画面を見ればHPは1。ますます運を使いきってし
まっていないか不安になってくる。

ゆっくりと立ち上がろうとするが、上手く力が入ってくれない。
そして声が聞こえて来た。その方向を見れば黒衣のプレイヤーがい
た。江坂は地面にうつ伏せに這いつくばって見上げる事しかできな
い。

「なるほど、火属性の耐性を上げるアーティファクトを装備……
してるのか。これで爆発のダメージが軽減された？ 強運にも程
があるが……とにかく、おめでとう。2位だ」

そして、江坂が次に見た光景はテンプレートで装飾された~ ga
me over~の文字だった。

錆びた牙（前書き）

D
e
t
e
r
i
o
r
a
t
i
o
n

9
9

p
e
r
c
e
n
t

錆びた牙

211名無し・投稿日…2020/7/11(水) 18:03..
55

おまいら、釣られたと思ってこれ見てくれ

h b b c .. / / d o u g a u p r o a d / f . A n c i e n t i
a / 5 0

212名無し・投稿日…2020/7/11(水) 18:23..
03

<<211

何だよこれw w w w w w w w

213自称最強・投稿日…2020/7/11(水) 18:23..
10

<<211

こw w れw w w はw w w w

214社長炎上・登校日…2020/7/11(水) 18:24..
01

このオーバードライブの出力ヤバくね？

215名無し・投稿日…2020/7/11(水) 18:24..
05

このヒバナってプレイヤー、初心者だな。このバトルのログ見た
けどこいつレベル10だわw w w

216弱肉強食・投稿日…2020/7/11(水) 18:2
6:33

でも他のプレイヤーのレベルは100越えのヘビーユーザーばかりだぜ？ この状況がおかしいだろjk

217名無しという名の名無し・投稿日…2020/7/11（水）18…27…28

そういや、エンシェンティアの公式HPに狐之葉市のバトルモードでバグがあったって書いてたな。

218名無しという名のナナシ・投稿日…2020/7/11（水）18…27…51

<<217

確かにあるな。 ってことはそのバグの結果が<<211の状況って事か。把握。

219名無しという名のシナナ・投稿日…2020/7/11（水）18…28…30

<<217

ってか、エンシェンティアがバグを起こすとか初めてじゃね？

220名無し・投稿日…2020/7/11（水）18…29…00

<<217—219

事の重要性に気がついた希ガス

221自称最強・投稿日…2020/7/11（水）18…29…10

<<220

気がするだけなんですな分かります

222社長炎上・投稿日…2020/7/11（水）18…29…

21

しかし一番はランキング9位のプライドを見事にそげぶした謎の
超新星ヒバナだろjk

29

223名無し・投稿日..2020/7/11(水)18..29..

<<222

はげど

31

224弱肉強食・投稿日..2020/7/11(水)18..29..

<<222

はげど

225名無しという名の名無し・投稿日..2020/7/11(水)18..29..40

たしか狐之葉市って上位ランカーの巣窟だよな

51

226自称最強・投稿日..2020/7/11(水)18..29..

<<215

一位、五位、九位、その下にも百位以内が数人いたな

59

227名無し・投稿日..2020/7/11(水)18..29..

<<226

競争率高すぎだろwww

01

228社長炎上・投稿日..2020/7/11(水)18..30..

とりあえず、このヒバナは俺の脳内猛者フォルダに登録余裕だな

229名無し・投稿日..2020/7/11(水) 18..30..

11

<<228

アッ！

230名無しという名のナナシ・投稿日..2020/7/11(

水) 18..30..19

<<228

通報しました

231名無しという名のシナナ・投稿日..2020/7/11(

水) 18..30..25

<<228-230

おまいらwwwwwwwwww



仙波は自宅の自室にあるパソコンの画面を見ていた。それに映さ
れているのはエンシェンティアの非公式情報交換掲示板だった。公
式では何かと書くことに制限をかけられたり最悪、運営から目をつ
けられる。そんなデメリットが多いが非公式のここならばぶっちゃ
けやりたい放題なのでエンシェンティアの攻略などの情報収集には
非公式の方が効率がいい。

そしていつものように掲示板を眺めていれば案の定だ。今日の昼
にあったことがもう広まってしまった。懸念はしていたがやはりこ
うなった。なってしまった。

風呂から上がったばかりで、まだ湿っている黒い短髪を首にかけているタオルでガシガシと拭いて水気を取ると、開いているウィンドウを閉じてパソコンをシャットダウンさせる。そして椅子から立ち上がりベッドに倒れ込む。そして目を瞑ってあのバトルの後からあった事を思い出す。

バトルモードの二位までの勝利者には特典が与えられる。いわゆる勝利ボーナスみたいなもの。それはゲーム内専用マネーだったり汎用アーティファクトだったり激レア、すなわち限定アイテムや限定アーティファクトなど、エンシェンティアで使うほとんどのアイテムがランダムで選ばれて勝利ボーナスとして与えられるのだ。そして江坂も例に漏れずに二位としての勝利者ボーナスを受け取った。問題はそれだ。別に普通のアーティファクトならば良かった。もしそうだったなら仙波はここまで思考を広げてはいないはずだ。

そう、江坂がボーナスとして受け取った物は限定アイテム。今まで仙波が見ていた掲示板でも度々議論の対象になってるいわゆるくつきのものだ。そのアイテムの効力は“アーティファクトと合成すれば固有スキルを使える”という効果を持つアイテムだった。

固有スキルというものはその名の通り、唯一無二だ。いくらエンシェンティアの規模がでかくても、誰かとは技などが被っているのが現実だ。しかし固有スキルならば全世界で自分だけの技なので盛大に自己を主張できる。そういった理由が主となってほとんどのユーザーが欲しがっているアイテムを、江坂が手に入れてしまった。

——とりあえず、絶対にトレードの材料や今の装備に使っちゃ駄目って釘を刺したけど……けどなあ。

弟のような存在がいつの間にか大きくなったものだと思う。寂し

いような、嬉しいような複雑な気持ちが仙波を占めていた。



江坂が初めてのバトルモードを行った翌日。江坂はヒバナとしてエンシェンティアのオンラインモードにログインしていた。今はタウンで装備を整えている最中だ。昨日、今まで使っていた大剣のアーティファクトは消滅し、フレイムブレードは粉塵爆発を使った瞬間に劣化率が100%に達したようで同様に消滅してしまっている。つまり今の江坂にはロクな装備が無いわけで。とりあえずタウンにあるショップで何かしらの装備を整えるところから始めなければならぬ。

「えーと、ショップはこっちか」

今はタウンのど真ん中、エリアに行くためのゲートの前にいる。他のプレイヤーが橙色の複数の輪に囲まれて現れたり消えたりを繰り返している往来の激しい場所だ。タウンの地図を開いて方向を確認して目的の場所へと足を運んだ。中央広場からほど近い場所に武器屋がある。そこが目的の場所だ。

武器屋の周囲には多数のプレイヤーがいて中央広場程ではないが混雑している。しかしラグは一切ない。いつでも軽快かつクオリティが高いのもこのゲームでは当然のこと。

武器屋に近づくとも目の前にウィンドウが表示される。実際に入店するのではなくこれ操作する事によって買いものを済ませる。だから店の周囲にプレイヤーが集まっているのだ。江坂もウィンドウを操作して商品の一覧を見る。今まで使っていた大剣の他に刀や双剣、槍、銃などもあるが数分悩みぬいた末に今まで使っていたもの

と同型のものを選んだ。

「あれ？」

ウィンドウを見てみると“修理”という欄があった。その項目の説明を見てみれば案の定だった。アーティファクトの劣化率を0%まで戻すというものであり、これを実行するにはゲーム内通貨が必要みたいだ。しかし劣化率が元に戻せると分かっただけでも良かったと江坂は思う。ただ壊れる一方ならやってられない。

後は回復アイテムなどを揃えようとして武器屋ウィンドウを閉じて次の目的地へと足を向けたその時。

「君、ヒバナ……だよね？」

背後からいきなり耳打ちされた。江坂は反射に近い反応で前へ一歩踏み出し素早く振りかえる。そこにいたのはもちろんプレイヤーだ。中性的な顔立ちをしたプレイヤーだが女性だろうか。腰まで届きそうな長い髪を一本結びにしている色は紺色より少し鮮やかな青。別段ここでは珍しい事もないが目を引くのは目の前のプレイヤーが背中に背負っている大きな戦斧だ。

大きさは江坂より高いプレイヤーを軽く凌駕している。刃と柄が重なっている箇所には獰猛な魔物が捕食する時のように、鋭い牙が並んだ大きく開かれた口をあしらっている。

「えっと……何か用？」

「ちょっと話したいことがあるんだけど大丈夫？　周りに気づかれないから耳打ちしたんだけど驚かしたみたいね。ごめんなさい。あ、これ渡しておくわ」

相手の声は大人の女性のものだった。大人とは断言できないが江坂よりは確実に年上だろう。そして彼女から渡されたのはプレイヤーアドレス。これがあればパーティへの勧誘が簡略でき、ミニメールも送ることが出来るようになる。一言で言うなら友達の証みたいなものだろうか。もちろん仙波からも貰っているから彼女からミニメールが来るのだが。

それを受け取ると江坂は自分のプレイヤーアドレスを彼女に渡す。一種のマナーのようなものだ。しかし周りが騒がしくなっている事に江坂は気づいた。少し耳を澄まして聞いてみる。

「あれってランキング五位“底無し喰”そこな　くらいじゃね？」

「うおっ……本物だな……」

「っていうか“底無し喰”と喋ってるプレイヤー、どっかで見たことあるような……」

「あの動画の奴じゃねえの？　あの“傀儡師”に喧嘩売った初心者」

「ああ、そう言われてみればそれっぽい……って、“底無し喰”とスーパールーキーがいるって何気に大事のような気がする」

最初は何気ない会話からざわめきへ。そして今では喧騒へと移り変わっていく。江坂はこの状況に戸惑いを隠せないが、目の前の女性プレイヤー“底無し喰”は違う。頭を抱えて深く溜め息をつく。江坂の方をまっすぐと見た。

「こうなる前に話をつけたかったんだけど仕方ない、か」

すると江坂の目の前に一枚のステータス画面と同じ表示枠が表れる。しかしそこに書かれている事はそれとは全く違っていた。内容は“ハルナさんがあなたをパーティメンバーに誘っています”という一文とその下に容認するか拒否するかを選択する部分だけ。江坂が彼女に目配せをすれば“底無し喰”はウイंकして促す。OKのボタンを押すと、途端に彼女は江坂の腕を引きダッシュを始めていた。彼女が向かう先は中央広場。

そして江坂は有無を言えないまま“底無し喰”と共にタウンから離脱してエリアへと転送していた。

江坂は一度まばたきをすれば景色が変わっているという体験をするとは思ってもいなかった。現在はタウンの喧騒は全て消え失せて、砂浜に波が打ち寄せる音だけが聞こえている。海辺だ。

右からは漣さざなみが聞こえて、左には砂浜が続いているが数メートル先には断崖絶壁が聳え立っている。この場にいるのは江坂と“底無し喰”の二人だけ。

「よし、ここなら大丈夫みたい」

「……………」

いまいち状況が把握し切れていない江坂だが、人払いの為にタウンからエリアに移動した事ぐらいは分かる。そして向こうが口を開いた。

「いきなりごめんなさいね。とりあえず一度は君と話をしてみたかったからさ。まさかあそこまで人が集まってくるなんて思ってたな

かったからエリアに場所を変えさせてもらったわ。自己紹介がまだよね。私はハルナ。一応ランキング5位“底無し喰”を名乗ってるわ」

「俺はヒバナ……まだ始めたばかりの初心者。ああ、その辺は分かるよ。で、俺に何の要件があるんだ？」

「はい、君にこれをあげる」

単刀直入に切り出したハルナが江坂に差し出したのは大剣型のアーティファクト。刃は片刃になっており刃の無い部分にはバーニアのような加速機構らしきものがある。しかし刀身全体に罅^{ひび}が奔って崩壊寸前に陥っている。これを江坂は身にしみて覚えている。

「劣化率が……」

「よく分かってるじゃない。そうね劣化率99%……一歩手前つてところ」

「なんでこんなものを俺に？」

「君に強くなってほしいから。他に理由はないわ」

そしてハルナは有無を言わずにアーティファクトを江坂に手渡した。

江坂は受け取ったアーティファクトの詳細を確認する。名称は“バスターブレードver. ラピッドアクセル”。A級の大剣型アーティファクトだ。^{ランク}

「A級？ 俺にくれるなら自分で修理して使った方が……」

「君に強くなっただけいいから。同じことを言わせないで」

初対面の江坂が見ても分かるほどにハルナはその一言で不機嫌になっってしまう。むしろ不機嫌というよりは敵意に近いものを感じる。彼女はまるで気分次第で草食獣をいつでも狩れる放漫な獅子のようだ。

「このバスブレはA級だから、修理にざっと8桁ぐらいいはいるんじゃないかしら」

江坂が一回エリアをクリアして良くて4桁程度の金額しか手に入らない。先が見えない事は無いが遠すぎる。そして獅子は一転して笑顔を見せる。

「今すぐ強くなれなんて言わないから、せめてそれを扱えるぐらいになったら、あなたが昨日立った舞台上で戦いましょう」

「……分かった。ありがとう」

「はい、それでよし。あと君が昨日貰った報酬のアイテムを合成しても劣化率は引き継ぎだからガラクタになるだけなんで無駄にしないように」

「そういうことは昨日、友達からさんざん釘を刺されたよ」

「そう、それならいいわ。変なところで大ポカをやらかしてもらっても困るし。じゃ、暇な時はいつでもパーティに誘ってね」

そう言って軽くウィンクしてみせたハルナはエリアから離脱して

タウンへと帰還した。江坂はこのままこのエリアでレベル上げをしてもいいがその前にエリア情報を見て戦慄した。

———推奨レベルが200からなんて文字通り桁違いだろ……。

ランキング5位の實力を垣間見たわけではないがそれでも桁違いのそれに手が届きそうもない。しかし約束してしまった。いつか昨日のような偶然で出来あがったバトルではなく、真っ向から戦おうと。

ハルナはタウンに帰還し一度だけ大きく伸びをした。自分に出来るだけの布石は打ったつもりだ。これがどういう結果になるのかは彼女自身分らない。しかし莫大な期待を寄せるだけの価値はあるとハルナは思っている。

ヒバナにあげたアーティファクトは決して安物ではない。A級と言えそうそう簡単には手に入らないものだ。イベントなどでしか手に入らない限定アイテムがほとんどであり、この上のランクは完全な限定物。更に言えば彼にあげたアーティファクトは限りなくSに近いAランク。ぶっちゃけ手に入れるのに相当苦労した。が、後悔は全くしていない。逆に嬉しいくらいだ。そう、これからまた新しい強者が出てくるのなら安い買い物程度の事。

タウンを軽いスキップで駆けていくハルナは周りから特異な目で見られない。その行動というよりも、彼女が背負っている彼女自身の身長よりもでかい戦斧がハルナを“底無し喰”であることを暗に公言しており、それが他のプレイヤーの注目を集めている理由だ。

鼻歌を交えているハルナの軽い跳躍に合わせて一本結びにしてい

る蒼い長髪が楽しそうに上下している。上機嫌そのものと言える彼女にしかし、使いこまれたロングコートのような黒衣を襟を立てて着こんでいる一人のプレイヤーが話しかけていた。

「えらく……上機嫌だな」

「あら、カイじゃない。何の用かしら？」

「いや、お前がそこまで上機嫌だとロクな事がないから……少し心配だな」

「別に特に何もしてないわよ。ヒバナ君に限定版のバスブレをあげたぐらいね。もちろんあなたの手甲と同じバージョンのやつ」

その言葉にカイが眉を小さく吊りあげた。それを見たハルナはうんざりしたように首を横に振る。

「頭固いわねえ……。ま、このぐらいはいいでしょ。劣化率99のガラクタは修理しなきゃ使えないし、修理する金が貯まるころには期待通りにはなってるはず」

「……どうでもいい。それよりだ」

「何かしら」

「昨日のバトルでソウイチロウが放った攻撃が絶好すぎるタイミングでジャマーモンスターに防がれた。あれをどう思う」

淡々とあまり抑揚のない声でカイはハルナに疑問を投げかけた。

今いる中央広場に複数ある巨大な噴水が一定の出力を以て水を吐き出している。その周りには幾百のプレイヤーが絶えず往来しており、現実と何ら変わりのないいつもの風景はゲームの中である事を忘れさせるようだ。そしてどこまでも澄み渡っている蒼天のグラフィックが、夕焼けのそれに次第に移り変わってゆく。噴水が無色から橙へと色付けされ、今までとは違った趣が表れ始める。ハルナは数分間考え込んで、応えた。

「バイトの私には到底知れない秘密事項だし、どうにもならないわよ」

「そうか」

カイは小さく首肯した。ハルナは腕を組み、言葉を続ける。

「それでも推測するのなら運営がヒバナ君のステータスを一時的に書き変えるぐらいのことをしないとあのバトルは説明がつかないとは思うわ。私的な意見だけど」

「やっぱりお前もそうか……ありがとう参考になった。まあこれもそれほど重要ではないんだ」

「何で訊いたのよ」

「……いや、チヅルはヒバナと幼馴染らしいからな」

「ふうん、そう」

ピリ、と空気が緊張するような感覚。それは果たして気のせいで済ませていいのか。それに今のハルナは会話の話題がいきなり飛ん

だなどという細かい事は気にしない。

「今日は落ちる」

ハルナのその発言にカイは予想通り、と言うように意味深な笑みを浮かべる。今の彼女は俯いている。夕日のグラフィックが逆光となって陰を作りハルナの表情は分からないが“底無し喰”が肩を震わせて笑いを押し殺しているのだけをカイは確認ができた。

「ちよつと……食べていいか許可を貰ってくる」

「期待はしない方が賢明だ」

「無理だったら……それでも食べちゃう」

“底無し喰”はこの世界——エンシェンティアから離脱する。黒衣のプレイヤーは歩き始めた。

江坂は体を囲んでいた橙色の複数の円環が消えたことを確認すると、タウンに帰ってきたことを改めて自覚した。念のために武器屋に行つて修理の欄を覗いてみる。ハルナから貰ったA級アーティファクト“バスターブレードver.ラピッドアクセル”。彼女はこれを略してバสบレなんて呼んでいたが。しかし、修理金額は最初に4という数字があり、後に0が七つ続いている。

「マジかよ……」

これは酷い、と思うが遠すぎるだけで決して届かないわけでは無いのだ。今はまだ初心者。焦る要素なんてどこにもないのだから。

武器屋のウィンドウを閉じてまたタウンを歩きだす。

目的の地は特になくタウンの中を散策するようなもの。空のグラフィックは青から燃えるような橙となっている。これは実際の日本の標準時に合わせて変動するようで、つまり今の時間は夕刻だ。やはり中央広場はプレイヤーの往来が激しく変化が多く、見ている分にも飽きはこない。

————虚しい……よなあ。

そうだ。江坂自身は何をするでもなく、ただ他のプレイヤーの動きを中央広場の隅で見ているだけに過ぎない。江坂は自分自身が何をやりたいのかだけは分かる。簡潔に言えば友達が欲しいのだ。幾らゲームでも仲間がいて、一緒に楽しむからこそ本当の意味で楽しめるのだろう。

結局、他のプレイヤーに話しかけることもできずただ時間だけが過ぎていく。十分程度そうし続けた時。そんなときに中央広場に大声、というよりも半ば叫び声が響き渡った。

「だ、だだ誰か！ 一緒に……ぱ、パーティー組んでくれませんかっ！」



取り返しのつかない事をしてしまった、とククルは内心で大量の冷や汗を滝のように流している。いくらなんでもタウンのど真ん中で声を張り上げることはなかったと今更に後悔が始まる。せめて「パーティー募集してまうす」的なもうちょっと柔らかい言い方できなかったのか。しかしもう遅い。今タウンにいるプレイヤーとい

うプレイヤーが自分の方を見ていた。

自分に向けられる無数の視線。声を出そうにも出せない。こんなところで上がり症がしゃしゃり出てくるなんて。顔が林檎のように真っ赤になっているのは自分でもわかるのだ。他人から見たらそれは酷いことになっているはずだ。

ログアウトして一時退散しよう、と思い至ったのは爆弾発言してしまってからどれくらい経ってからだろうか。早速ウィンドウを表示してログアウトを実行しようとするが。

「えーと、パーティー入ってもいい、よな？」

「え？」

突然の事に驚いてしまった。自分から申し込んでおいて疑問で返すなんて何様、と考えれるぐらいには調子が戻ってきた。

話しかけて来たのは男性プレイヤー。アバターは着用していなくてスタンダードのまま。これと言った特徴も無いが、どこかで見たことがある。しかしその疑問は後回しにする。

「えっと……大丈夫、です」

「そっか、じゃプレイヤーアドレス渡すな？」

「え、は、はい」

動揺しまくっている自分が惨めだ。声からして高校生ぐらい——年上かもしれない。プレイヤーアドレスを受け取ると自分も渡す。

「俺はヒバナ。あ、初心者だけど大丈夫か？」

「わ、私、ククルです。その……私も初心者ですし、お気になさらず」

思わず頭を下げて「よろしくお願いします！」なんて大声で言っ
てしまいそうで困る。冷静に努めるが無理かもしれないという諦め
がよぎる。

と同時にどこからドカドカと盛大な足音が聞こえてくる。

「そのパーティー、ちと待ったあああ!!」

———関西弁?

なんて疑問に思った時に目の前に居るヒバナが吹っ飛んで、入れ
替わりに赤いキャップ帽を目深にかぶったプレイヤーが彼がいた場
所に止まった。

「ワイもパーティー参加してええかな!？」

目深にかぶった赤いキャップ帽。上半身はロング丈の黒いベスト
だけを着ている。つまり上半身はほとんど裸に近いが程良く肉がつ
き、引きしまっている褐色の体軀はそれこそ歴戦の戦士を彷彿させ
る。腹部には白のタトゥーが入っており、七分丈で深緑色のアーミ
ーパンツを履いている。

何より、いきなり彼が迫ってきたということ。あがり症のククル
にとってそれは。

「ひっ……!？」

体が無意識に行う条件反射。それを以てククルは両手で迫ってき
た彼を突き飛ばす。

「どわぁ!？」

そして、ククルに突き飛ばされたプレイヤーはそのまま地面に力なく大の字に仰向けで倒れ伏した。

「え? え?」

——パーティーを組んでくれるということは分かるし、嬉しいけど……何で、どうやって、ヒバナ君とこの人の二人が倒れることになったんだろう?

疑問は解決しないまま数十秒が経ち、しかしククルにとってその間は時間が止まっているように感じていた。そして彼女の時間が動き出せたのは勢いよく飛び起きたヒバナの怒声による声のおかげだった。

「おい、お前! 一体何のつもりだよ!」

「え? ワイ? ワイはこの子とパーティー組むために来たんやけど。別に君には興味はないよ」

ずいとは迫る江坂に対し白々しい態度を取る関西弁のプレイヤー。彼は江坂の文句を適当に受け流し、視線でククルに助けを求めている。そして喧嘩が始まったと理解したククルは拳をわなわなと震わせた。

「いい加減にしてください!」

ククルがパーティーを募集した時よりも大きい声で響く制止命令はやはり彼女自身からだった。ビシッと人差し指を関西弁プレイヤーに差し、怒鳴る。

「あなたもあなたでしようよ！ 名乗りもせず一方的にパーティーに入りたいとせがみ、あまつさえ他のプレイヤーを突き飛ばして謝罪の一言も言わないなんてどういう了見ですか！」

その剣幕は女性のものではなかった。ククルは気おくれするどころか関西弁プレイヤーに向けて大きく一步を踏み出して睨みを利かせる。身長差がありククルの方が頭二つ分程度は小さいがそんなものは関係なかった。呆氣にとられているのは江坂と関西弁プレイヤーだけでなく、付近にいる他のプレイヤーも同様だった。

ククルは今更周囲の空気が固まっていることに気づいていたようだ。そして空気が抜けていく風船のように彼女の威圧感が委縮していく。

「すみません。ワイも調子に乗りすぎましたわ。この通りですわ」
しかし、周りの視線は関西弁のプレイヤーは深々と頭を下げると、ククルもあわてて首を振って返答す。

「私も出過ぎたことを言ってすいません……」

「いや、ワイの方が悪いがな。君も申し訳ないな。この通りや」

マナーがなってないその程度のプレイヤーと思いきや、江坂にも素直に謝ってきた。江坂も応じる。

「ああ、いや、仕方ないなら別にいいけどさ」

「あんさんごつつ優しいな！今までのプレイヤーなら問答無用で即解散やったのに……」

関西弁のプレイヤーは目から流れ落ちる涙を腕でぬぐいながら江坂の肩にもう片方の手をぽん、と置いた。ある程度場が納まってきたところで改めて自己紹介が行われる。周囲はもうククルや江坂には目もくれず各々の時間を過ごしている。そして江坂とククル、関西弁のプレイヤーも今ではタウンで何かしらの騒ぎを起こしているプレイヤーではなく、周囲と同じエンシェンティアをプレイしているプレイヤーへと成っていた。

「ああ、自己紹介がまだやったな。ワイはキョウスケや。よろしゅうな」

キョウスケと名乗った関西弁プレイヤーはお辞儀程度に一礼する。江坂も同様に自己紹介するとキョウスケは丁寧な物腰で応対してくれた。そして彼は頭に右手をあてて俯きながら言う。

「それでどうするんや。パーティは決まっても目的が決まっていななら、何もすることはあらへんで？」

「あゝ、そうだな。とりあえずマップでも行くか？」

「そうですね……」

江坂の提案にククルがゆっくりと頷く。キョウスケも首肯すると二人に質問する。

「とりあえずヒバナのレベルが10で、ククルちゃんはどうかの？」

「私は……えっと、レベルはまだ5です」

「そうか。ワイが48やから……そうやな、レベル20ぐらいのエリアなら大丈夫かいな」

遠慮がちに言うククルに対して特に気にした様子も無く普段の調子で話しを進める。江坂はそれを傍から見ているがその振る舞いだけでキョウスケは根が良い人なんだと自然と理解できる。

「えっと、それだけレベル差があっても大丈夫なんですか？」

「いけるいける。俺がポコポコっと倒してヒバナとククルちゃんがちゃかちゃかっとレベルアップするって寸法よ。んである程度レベル上がればレアアーティファクトを狙うんや。これでええやろか？」

「オッケー」

「はい、大丈夫です」

今いるのはタウンの夕暮れの芸術的な噴水が幾つも展開している中央広場。見る人を現実とゲームの区別を曖昧にするほど繊細なそれらは、夕日によって今までとは違う趣を醸し出している。

「じゃ、早速行きましょか」

三人の中で一番の経験者であるキョウスケがリーダーとなり、橙色の複数の円環に包まれてパーティはエリアへと転送された。



江坂たちがたどり着いたのは神殿だった。天井は遥か高く、広大な空間を支える装飾が施された幾つもの太い石柱。床もまた石造り。どうやら今回のエリアはこの神殿内部の屋内型のようなのだ。

「よし、ここって推奨レベルが20からなんだよな？」

「せやな。とりあえず役割分担しよか。まとまりが無いと足の引っ張り合いやさかい。みんなの使こうとするアーティファクトはなんや？」

「俺のアーティファクトは大剣だな。近接が主ってどこか」

「私は経典です。後方支援が向いてるかなって……」

それを聞いたキョウスケが二度頷いて、右手を顎にあてて思考を深めていく。十数秒経つと快活な声でこう言った。

「そかそか。これは即席にしてはごつつええパーティやで。まずはヒバナ。お前さんは前衛やってくれや」

「おう」

「で、ククルちゃんは経典が使用アーティファクトなら術式を使えるな？ 攻撃か補助かはこの際ええから、それで後方支援頼むわ」

「了解です」

「で、ワイは遊撃といこか。ぶっちゃけ、レベル20のモンスター程度なら瞬殺やし危なくなったらワイが助けるさかい、二人とも思う存分やったってええで」

キョウスケは右腕を突き出し親指を立ててグッジョブのジェスチャーをする。そして三人は神殿の最奥部を目指して歩き出した。

神殿内部は片側四車線の道路程度の幅がある一本道だった。天井はそこが奈落のように錯覚してしまうほどに高い。中央には天井を支える太い柱が進行方向と同じ方向に等間隔で並んでいる。古代のものなのか石造りの壁や柱や床などに亀裂が見られ、蔦なども神殿内部を縦横無尽に張っている。

そして歩いている三人の目の前に現れる~Battle field development~の表示。バトルフィールド展開。戦闘開始の合図である。

「やっこさんが、おいでなすったみたいやで」

三人と相對するのは蔦。恐らくそこらじゅうにある蔦に擬態していたモンスターなのだろう。蔦でできた棒人間のような体を持ち、頭部は口がそのまま取って付けられたような不気味そのものである。まるで食虫植物が未熟すぎる擬人化を経たような印象を受ける。

「よっしゃ！」

先手必勝とばかりに江坂は肩に見えない何かを背負っているよう

に背後の虚空を後ろ手に掴み、その腕を振り下ろす。いつの間にか江坂の手には大剣の柄が握られており、続いて刃と共に虚空から吐き出される閃光が見通しの良い神殿内部を仄かに照らす。

脇に構えた大剣を力任せに上へと薙いだ。斬り上げ。そして植物型のモンスターに赤く14という数字が表示されたが、相手は構うこと無く江坂に反撃としての噛みつきを行ってくる。それを避ける間もなく受けてしまい、今度は江坂に赤く53の数字が浮かび上がる。

「いくら相手がふざけた格好しとっても向こうのほうが格上や。もちっと慎重にいや」

「……分かってるって!!」

背後からキョウスケのアドバイスを貰ったが江坂はそちらに振りかえることはせず、そのまま大剣を構えなおす。すると江坂に青く53という数字が浮かんだ。

「回復?」

「え、えと……私がサポートします。ヒバナ君は構わずやってください」

江坂は今度こそ後ろを振り返った。ククルの目の前に二冊の本が浮いていた。青い厚紙が表紙の本はククルの右手の正面、江坂に表紙を向けて浮いている。茶色の革表紙の本が彼女の左手の正面、こちらと同じである。

「ヒバナ君、後ろ!」

ククルの警告で気がついた。江坂は気を取られていた。だから今まで剣を向けていた敵に付け入られ、今日の前に大口を開けた蔦が迫っているのだ。

「グランスランス！」

ククルが詠んだのは術式発動の呪い。茶色の革表紙の本が淡く発光している。

術式とはアーティファクトを媒介として自然に干渉し様々な現象を起こすことである。そして彼女が発動させたのは地面を円錐状に隆起させ標的を貫くというもの。江坂が使ってる大剣のような装備型とは違う影響型アーティファクト。経典が発する淡い光が煌めきとなって術式が始動する。

江坂にとってはダメージを受ける寸前で大地から生えてきた円錐状の棘が無作為に生えてきたようだった。自分の目前に繰り出される一撃はいくら仲間のものとは言えどもお世辞にも助かったとは思えなかったが、事実はその棘が敵にヒットし怯んでいた。そしてチャンスと見た江坂は追撃を行い、無事に撃破に至る。

「おおぅ……完璧なインターセプト……ククルちゃん凄いわ」

キョウスケは感嘆の声を漏らした。江坂も首肯する。それを目を丸くして確認したククルは頬を赤くして、照れた様子で両手を前を突き出してしきりに振る。

「え……いや、たまたまですよ。たまたま。私がそんなの狙ってできるはずが無いじゃないですか!..!」

まるでその声量が彼女の心境を物語っているようで。かくして三人は何ら問題も無く神殿のダンジョンを奥へと進んでいく。次々と

今のと同じ敵を倒すが、このエリアでは同種のモンスターしか出現しないらしい。

江坂は今までに経験したことのないコンビネーションがこんなにも頼もしいとは思ってなかった。後方にいるククルのお陰で少しばかりの無茶は問題がなくなっているのだ。

江坂の体を金色の光が五回ほどつつみ、ククルの体を七回ほどつつんだころ。当初のレベル上げという目的は充分に達成できたといっているだろう。江坂とククルにも余裕が出始め、戦闘中でも会話を交わせるようになっていく。

「あ、そういえばヒバナ君って初期アバターのままだけど変更しないんですか？」

鳶のモンスターがヒバナに飛びかかってきたが、ヒバナはカウンターの要領で体を捌いて大剣で一撃を見舞う。そして敵が怯んだところに追撃とばかりに大剣を振り上げて強力な一発を叩き込んだ。

この神殿を攻略し始めてから既に5レベルの差がある今のヒバナは先程までとは違い与ダメージが増えている。隙を見て連続して攻撃すればなんとか一体は倒せるほどだ。そして敵を一体屠ったところでヒバナはすぐさまバックステップを踏んでもう一匹からの攻撃を紙一重でかわす。

「俺そういうのにこだわると、とことんこだわるからさ。まあ良いかなとは思うけど」

しかし、かわしたように思えた攻撃はヒバナに命中しHPが削られてしまったが、右前方でキョウスケが自身のアーティファクトを構えているのを見たヒバナはそのまま追撃はせずに続けて後ろに下

がった。

「ほいほい、余裕をかますには早いでっせ」

パパン、と左方向から二度の火薬の炸裂音。江坂に一撃を与えた直後に銃撃を受けた蔦のモンスターはすぐさま塵となって消え失せた。それは銃のアーティファクトから発せられたものだった。その使い手であるキョウスケは両手にオートマチック式の銃を構えている。いわゆる双銃というスタイルである。

距離があってもキョウスケの援護は迅速かつ正確だった。今のようにヒバナがピンチと見ればすぐさま射撃を行う。これがククルでも同様だ。流石は上級者といったところなのだろう。そして今回の戦闘が終了する。

「サンキュ」

「気にせんでええよ。こんなの手間にもならへんからな」

ヒバナの肩をばんばんと叩くキョウスケはそのままヒバナをヘッドロックする。

「ちよっ!？」

痛みは無いが体勢は崩れてしまう。よろめきながらキョウスケの腕に体重を預けてしまうヒバナ。

「確かにククルちゃんの言うとおりでな。ヒバナもアバター変えたらいいのに」

「まあ、考えとくよ」

「なんや、えろう愛想のない」キョウスケがヘッドロックを解く。ククルが心配そうに見ているが杞憂だと説明すると安心したようだ。笑っている。

「そんなもんだって」江坂もまた笑う。見知らぬ誰かと会って、一緒にゲームをただけでこんなにも嬉しくなれる。これから一緒にエンシェンティアをしたいと心からそう思った。

三人はまた歩き始める。この神殿を攻略し始めて30分が経過した。キョウスケはともかく他の二人には疲労の色が見え始めている。

「そろそろ最後か？」

「そうですね……結構進んでいますし。それにずっと一本道だから道を間違えるはずもないでしょうから」

「そやなあ……まあ、当初の目的のレベル上げは順調やしあとはボスをちゃっちゃか倒そか」

三人は自然と足を止める。今までただ一本道だったが目の前に扉が表れた。それはもはや扉と言うより壁と言う方が適切かもしれない。扉のサイズが天井と神殿の横幅がそのままなのだ。扉の全長はそれこそ目分量ですら測りようがなかった。

そして風が流れる。扉がゆっくりと内開きに開き始めたのだ。三人は横に並んで奥に入っていく。扉の先は部屋だった。広大なことには変わりがないが先がある。10メートル四方程度の広さの場所である。この部屋の最奥には祭壇が見えるが、その目前には紫色のローブを羽織った何かがいる。フードを目深にかぶっていて表情が

見えず不気味な雰囲気を助長させている。

「ボスやな。こいつを倒せばめでたくクリアやで」

「オツケー」

「頑張らましよう！」

紫のローブを羽織っているそいつは幽鬼のようにゆらゆらと不規則に宙を浮いている。そしてローブの隙間から出した骨と皮だけのような細い片腕に携えている経典が光る。それは直接的にヒバナたちに対して危害を加えるものではなく、幽鬼の真下の地面に二つの魔法陣が浮かび上がりそこから這い出る様にして上半身だけの石像がそれぞれの魔法陣から出現した程度だった。

石像の大きさはプレイヤーの三倍程度。頭部や体などの大まかな分別があるだけで表情などの小細工はない無骨な造り。巨大な石をそのまま人型に加工しただけのもの。下半身が無いのでうつ伏せに寝そべっているが両腕のリーチは余りあるほどに広いだろう。それが二体、左右に並んで三人を目鼻口のない顔で見つめている。

「召喚系かいな……ああいう奴は大元を叩かん限り、手下は幾らでも湧いてくるんが定石やな」
セオリ

「つまりあの経典を持ってるやつを倒さない限り、私たちは延々と石像の相手をするという事ですか？」

「正解やククルちゃん。つまり経験値稼ぎには持って来いって事と同じやけどな。補足説明しとくとあの紫ローブは稀にレアアイテムファクトをドロップするんやけどもどうしよう……狙うか？」

右側の石像が右腕を横に薙いだ。それは突風を伴って三人を強襲するが三度の発砲音で突風が消え失せた。強襲を仕掛けていた右側の石像がそれだけで撃破されていたのだ。

「俺なら適度に経験値を稼ぎつつ、レアアーティファクトを狙うかな」江坂は大剣を脇に構えなおして体勢を整える。

「私も同じです。疲れない程度でなら問題はないと思います」クルも同意を言うと両の手の正面に浮遊している経典のページを捲る。

「よっしゃ、全員一致やな。一花咲かせよか」

キョウスケが撃破した石像がいた場所に魔法陣が波打つように表れ、そこから同様の敵が出現した。親玉である紫色の幽鬼が空いた戦力を補充したのだろう。そして元通りとなった二体の石像が片腕を振り上げて勢いよく振り下ろす。それは三人に中ることはなかったがそのまま石畳の地面を砕くことで、それらがまるで散弾のように四方八方に飛散し、無差別の広範囲攻撃を行った。

「……っ！」ヒバナは一直線に飛来してくる石片に対して大剣を地面に突き刺し、大剣の腹の陰に身を隠してやり過ごす。

次弾が来ない事を確認すると石像の内、右側の一体へ向けて全速力で走りだした。相手の一撃は強力だが遅い。足を留めることがなければ捕まることはまずないと考えればいいはず。

しかし、上から滑空してきた何かによって江坂は体当たりをくらいい思考を中断されてしまう。江坂を攻撃したのは蝙蝠だった。大きさは手の平程度と小さいが小回りが利くタイプ……そう分析していた彼の近くでまた巨大な石像が動いたのを音で認識した。重い一撃

が来るが避けきれない。

回避よりも防御を選択して身を固めた江坂だったが直後に銃撃が連続して彼に狙いを定めていた石像が撃破された。後衛からの援護で助かったと肝を冷やししながら、しかし江坂は奇襲の原因が分からずにさらに焦燥に駆られる。

離れた距離からの援護を戦術としていたキョウスケとククルは江坂のように直接的な被害は受けていないみたいだ。

「こりゃ厄介やで……」

「ヒバナ君！」

離れたところから状況を見ていた二人はヒバナよりは現状を把握できているらしい。舌打ちをするキョウスケはやれやれとでも言うように、俯いて左右に首を振る。ククルは自分の役割である補助をすぐさま実行に移し、HPが削られた江坂を経典を用いて回復する。混乱しきっている自分に喝を入れて、江坂は一旦石像たちから距離を取った。二人がいるところ辺りがとりあえずの安全圏と判断しそこまで下がる。

新しく上空に展開される複数の魔法陣から江坂を奇襲した同様の蝙蝠が湧きだしてくる。数はざっと二十程度だろうか。質よりも量で展開された新たな敵戦力。そしてまた撃破した分の石像が召喚ほじゅうされる。

「あの蝙蝠は見たまんま、あの紫ローブが召喚したもんやでな。ヒバナでも一撃あてれば倒せる程度の雑魚やろけど、でかぶつを集中的に攻撃させへんようにあの蝙蝠が小回りを活かして邪魔に入る」

「そして蝙蝠に気を取られれば石像から強烈な攻撃がくる……で

すよね？」

「ご明察やククルちゃん」

「ヒバナは何かしら他のアーティファクトは持っていないのか？」

「あゝ、俺はこれ一本だな今は」

江坂は駆ける。要領は先日のバトルモードでビルの瓦礫を足場にして遙か上空を目指した時と同じ。しかしあれよりは遙かに難易度は低い。今は江坂を叩き潰そうとして振り下ろされ、停止したばかりの石像の腕を足場にして上へ駆け上がり、空中に群がって不規則に飛びまわっている蝙蝠の内、二体斬り伏せる。そして江坂は跳ぶ。動き出した石像の腕と言う不安定な足場から宙空へ身を投げ出した。

「アーティファクトが種類だけで……それになんつー戦い方をしよるんや。まあ……動画で見た通りに型破りな奴で安心したけど」

空中で落下するしか行動のできないヒバナは、しかし、身を捻り、攻撃を仕掛けてきた蝙蝠を迎撃してまた斬る。それはもはや攻撃をしているというよりは踊っていると形容した方がいいのかもしれない。舞っている。剣をまるで扇のように扱い、体は落下しているというのに体を捻り全身を使って全霊の一撃を繰り出している。

「凄……オーバードライブ無いのに」ヒバナに対して感嘆の言葉を漏らしたククルは。「あれ、オーバードライブ？……ヒバナ、ヒバナ……もしかしてヒバナ君ってあのランキング9位のソウイチロウさんと戦ったヒバナ君！？」

「なんや、今頃気づいたんかいククルちゃん。しかしあれは凄

いの一言や。肉体強化のアーティファクトも無しにあんな動きができるのは立派な才能やでな」

ヒバナは背中から着地する。それはむしろ意図して背中から落ちたようだ。無理をして無事に着地するよりある程度のダメージは覚悟して落ちやすい姿勢で済ませてしまった方が良くと判断した故か。さらにヒバナの今の行動によって蝙蝠の数が半数近くまで減っている。が、石像と同じように紫色のローブを羽織っている幽鬼が経典を使用して宙に魔法陣を描き出す。そこから出てくるのはヒバナが撃破した蝙蝠と同数のそれら。

敵の絶対数は決まっているみたいだがその補充はとて^{リカバリ}も速い。

「ククルちゃん。ヒバナが蝙蝠を倒してからまた召喚されるまでの時間、数えとった？」

「えと……三十秒くらいだと思います、多分……」

自身が無さそうな返答だったがキョウスケは二度頷いて礼を言った。そして前衛で剣を振るっている江坂に半ば怒鳴り声で声をかける。

「ヒバナ！その蝙蝠と石像は倒したらほぼ三十秒間隔で再生するんや。石像二体、蝙蝠約二十体、親玉の紫ローブ、合計約二十超の敵を一掃できるか！？」

「出来るわけねえよ！」

「なら退がっつけや。俺が一掃するわ！」

「レアアーティファクトはどうすんだよ？」

逡巡したかのようなそぶりを見せたキョウスケだったがすぐに言う。

「こいつらはさすがに面倒や。違うエリアでやった方がもうちょっと楽やろ。ここは忙しすぎるで。ククルちゃんもそれでいいか？半ば強引に話し進めて申し訳ないけど」

「あ、私は大丈夫です」

「俺も良いよ。充分にレベルは上がってるしな」

「ありがとうな。詫びの代わりにワイのとおっておきを見せたる」

キョウスケは両手に持っている銃を閃光を吐き出す虚空に仕舞い、続けてまた銃を二丁取りだす。しかしそれらは今まで使っていたものとは違っていた。銀色に煌めく銃身。オートマチック式ではなくリボルバー式のものがキョウスケの左手に握られている。

そして彼が引き金を引く。射出された弾丸はそれぞれ一発ずつ。そして二体の石像にこれまた一発ずつ着弾した瞬間に轟く爆発が起こった。それは石像を一瞬で瓦礫に変えてしまうような大規模のものであり、キョウスケは続けざまに残りの弾丸を全て使いきる。それは圧倒的破壊の連続だった。有無を言わさない爆風と炎熱の連続は石像や蝙蝠、そしてそれらを召喚した紫のローブを羽織っている幽鬼。三人と戦闘を行っていた全てが塵となる。

苦労が嘘のように一瞬で終わってしまった。10メートル四方のこの部屋を埋めていた二体の石像と数多の蝙蝠が消え失せて、それ

なりに広い場所だったのだと錯覚する。そして正式に戦闘終了の合図がファンファーレとして訪れる。これはダンジョンをクリアしたことと同義でもある。

そして江坂とククルの体が金色に光る。レベルアップである。

「これで俺は16か。6も上がったの順調すぎるくらいだな」

「私なんて8も上がって今レベル13ですからね」

感嘆の声を漏らす二人に対してキョウスケはうんうんと頷く。

「よしよし、これはこれで経験値入ったし守備は上出来やな」

「じゃあ、一旦タウンに戻るんですね？」

「でもレアアーティファクトは勿体ないよな……」

「落ち込むんやないで。またレベル上げてから来たらええだけや」

ダンジョンをクリアしたことによってタウンに帰還するための装置が10メートル四方のこの部屋の中央に出現する。江坂とキョウスケはそれを目指して歩き始めるが、ククルはそうしない。彼女は奥にある祭壇を凝視している。

「ちょっと待ってくださいませんか？」

ククルが紡いだ待機を所望するその言葉に男性陣二人は足を留めて彼女の方を振り返った。

「どうしたんだ？」

「えっと……あの祭壇の中央の部分だけ、グラフィックが少し違うような感じがするんです。……間違ってるかもしれませんが」

江坂の問いかけに対して次第に尻すぼみになっていくククル。しかしキヨウスケはククルの示した場所まで歩み寄り丹念に観察をする。眉をひそめてまじまじと観察を続け、そして首を傾げたり顎に指に手を当てて黙考している。時には実際に祭壇に手を触れてみるが特に何かが起こるわけでもなかった。

その間、江坂とククルは少し離れたところで二人並んで、キヨウスケの行動をただ見ていた。初心者がそんな事をやっても対して結果は変わらないのでせめて邪魔にならないようにこうして後ろに控えているのである。

そして5分程度が経過した。ククルの心を占めているのはひたすらに罪悪感である。もしあんな事を言わなければ今頃は次のエリアに向けて三人で準備を進めているはずなのに。楽しむはずの時間がただ食いつぶすだけの無駄なものになっているのだ。二人には申し訳がない。そして自分が余計なことを言ってしまった事の謝罪を言おうと息を吸って発言した瞬間である。

「あ、あのっ……」

「ビンゴやでククルちゃん!!」

キヨウスケの今すぐにも狂喜乱舞しそうな程に上ずった声に中断されてしまった。呆氣にとられてきよんとするククルに、キヨウスケはオートマチック式の双銃のアーティファクトを虚空から取り出し行動で証明する。両の引き金を引いた。それは一度きりではなく弾層が空になるまでひたすら射撃を行う。銃弾によって煙が祭壇の周りにもうもうと立ち込めるが、数秒の内に晴れて全貌が露わ

になる。

「ドロップ確率が低いレアアーティファクトを必ず入手できる裏ルートってやつや。まさかこんな感じにカモフラージュしてるとなんて思いもせんわ」

キヨウスケは苦笑しながら祭壇があったところに歩み寄る。そこには瓦礫と化した祭壇の他には一冊の経典がただ当然のようにあるだけである。彼はそれを手に取って後ろで待機していた二人の場所まで行く。

「うわ……ソロモン72柱の経典かい……なかなかレアやでこれ。じゃあはい、ククルちゃん」

そしてキヨウスケは何の躊躇も無く手に入れたばかりのレアアーティファクトをククルへと差し出した。これは流石に状況が呑みこめないのかククルは拒絶する。

「な、なな何で私が！？」 入手ゲットしたのはキヨウスケ君なんだし……」

「阿呆、ククルちゃんが言わへんかったら気づかへんままタウンに戻ってたんやで？ これはククルちゃんの実力で勝ち取ったアーティファクトであって、ワイはその手助けをしただけや。お前もそう思うやろヒバナ？」

「うんうん」

キヨウスケは江坂も味方につけてククルに反論ができないような状況を作り上げた。そして彼女は戸惑い、ぎこちない動作ながらも

キョウスケから経典を受け取った。そして貰ったばかりのアーティファクトのデータを調べ始めた。

「ソロモン第57柱オセ……?」

「なかなかのレア物や。大事にしいや」

「あ、ありがとうございます!」

ククルは目を潤ませながら深く頭を下げる。彼女はそのアーティファクトを大事そうに両手で抱きながら、二人に続いてタウンへの帰還装置へと小走りで向かった。



「えと、こ、ここからどうします? またどこかのエリアに行つてレベル上げかアーティファクト取りに行くんですか?」

タウンの中央広場にある噴水広場の一角でククルは今日知り合ったばかりの二人に今からの行動を訊いていた。ククルは噴水の縁に腰掛けており、その両隣りに男性プレイヤーがいるのは緊張の種でしかないが、表には出さないと内心で奮戦する。

———少しでも変わる切っ掛けが欲しくてエンシェンティア始めたのに、普段通りにしてたら、何の意味も無い……頑張らなきゃ。

「俺はまだ時間も余裕あるしもう一回ぐらいはエリアに行けるな。アーティファクトが一個だけつてのもあれだし、新しいのが欲しいかな」

ククルの右隣に座っているヒバナはそう言うと、両腕を上へと上げて伸びをする。

タウンの空は既に夜となっている。天を覆う黒色のカーテンに大小様々な無数の光点が煌めいている。そして一際輝いている白銀色の月。街灯などなくてもその太陽とは違う優しい光がタウンを仄かに照らしている。

「ワイはそろそろ落ちるで。毎週楽しみにしてるアニメを見逃すなんて許されへんからな」

「そうですか……」

「そない残念そうな顔したらあかんて。またいつでもパーティーに誘ってくれたらええからな」キョウスケはそう言うのと立ち上がる。
「ほなな。また今度」手を振って、彼は橙色の円環に包まれて離脱ログアウトした。

「ヒバナ君はエリアに行くんですよね？」

「そうだけど、一緒に行くか？」

「はい、二人から譲ってもらったアーティファクトも試してみたいですね」

そして彼女が立ち上がると、江坂も立ち上がる。

「よし……じゃあ」

そこで江坂は言葉を切った。不思議そうに首を傾げるククルは江

坂の事を真っ直ぐと見つめている。江坂はウィンドウを表示させて数度の操作を行う。

「ごめん、ミニメール来た。ちょっと待ってくれるか？」

「あ、はい、分かりました」

ククルは江坂のその動作を何をするでもなく自然と見ている。もちろんメールの内容をみるような無粋なことは絶対にしない。数分後に江坂がウィンドウを閉じると気まずそうに彼が告げる。

「あゝ……悪い、俺から言っというてなんだけど、急用が入ったんだ。だから……その」

「あ、分かりました。じゃあ今日はこれで解散ですね」

「ごめんな」

「いえ、気にしないでください。また一緒にパーティー組みましよう」

「了解、じゃあまた今度」

「はい」

ククルは江坂がログアウトするのを見届けるとこれからにどうするか悩む。現在の時刻は夜の七時ごろ。

———遅くなり過ぎても危ないし……今日はこのぐらいで止めようかな。

彼女もまたエンシェンティアから現実へとまた戻る。

「ふう」

江坂はコクピットのカバーが頭上に上がるのを確認すると左手にあるカードリーダーから自分のプレイヤーカードを回収する。それが終わると個室のドアを開けて外へ。廊下の両側にはドアが無数にありその数だけエンシェンティアをしているプレイヤーがいるという事。

今日で二人の人と知り合えたのは嬉しかった。世界は広いからこそ今日のように見ず知らずの人たちと一緒に遊ぶことができるし、また会う約束もできる。普段では決して作れない交友関係を作れてこのゲームを始めて良かったとも思う。欲を言えばいつかはオフ会のようなものにも憧れる。

今いるビルそのものと言っていいゲームセンターの4階から一回を目指す。仙波からミニメールが来ていたからであり、だからこそログアウトしたのだ。『いい加減返ってこないとおばさんが怒ってるよ』とのこと。おばさんと言うのは江坂の母親のことだ。

1階のファーストフード店には仙波が待っているだろうが別段そこまで急ぐ必要もないはずなのであることにする。

階下に行くためのエスカレーターに足をかけようとした時。

「えっと……待って下さいヒバナ君！」

声をかけられた。その声はさっきまで一緒にエンシェンティアをしていた彼女の声であり、しかし決してあり得ないはずの声だった。

オンラインモードとは全世界で同時にプレイヤーがエンシェンテ
ィアをしており、あらかじめ友達と落ち合う約束をしていてゲーム
内で会うことはまだしも、ゲームで知り合ったばかりのプレイヤー
とすぐに会うことができるという、前者と正逆のパターンは起こり
得ないはずなのだ。

「あ……えと、わ私ククルです。さっきまで一緒にエンシェンテ
ィアをしていた……ええと、えと、これで信じてくれますか？」

自らククルと名乗った彼女がピンク色の長財布から取り出したの
はプレイヤーカード。そこにはしっかりとさっきまで一緒に遊んで
いたプレイヤーの姿があった。

しかしいつまでも江坂が反応を示さないからかククルの顔が徐々
に赤くなっていく。

「あれ？ ひ、人違いでした？ ご、ごごごめんなさい！」

「あ、いや、合ってる合ってる。俺はヒバナだよ。ほらこれ」

江坂も応じてプレイヤーカードを提示する。それを見た彼女の顔
が一転して明るくなる

「まさか本当にこんなことあるんだな……」

「私もびっくりですよ……」

案外、世界は狭いのかもしれない、と江坂は内心でひとりごちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7148o/>

エンシェンティア

2011年11月13日06時31分発行